

---

# 月と潮騒

しばたや

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月と潮騒

### 【Nコード】

N1989P

### 【作者名】

しばたや

### 【あらすじ】

海辺にある特別と言うほどの特徴のない村。

魔物から人々を守る役目を持った守人を父に持ち、その為に呪いを受けたと噂される少女・サラサ。

魔物との戦いで命を落とした少女の父に代わり、新しい守人として村にやってきた少女の幼なじみである青年・ザン。

両親の死と共に心を閉ざして生きる少女に、青年の思いは届くのか。



## ブログ（前書き）

初めてこちらに投稿させていただきます。

まだ勝手がわからない新参ですが、お気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

## プロローグ

### 序

闇の中、音を立てて薪が爆ぜた。

ちりちりと、小さな火の粉が舞い上がる。

粗末な小屋、土間の中心、土を掘り石で組んだ囲炉裏で薪が燃えている。

囲炉裏の周りには食器が複数組と、織物の敷布。

遠く、波の音が聞こえる。

火の側には幼子を膝に抱いた女が一人。鉄の火掻き棒で火をかき混ぜて、新しい薪をくべる。ぱちりと音がする。

女の膝で、幼子は手の中のを炎にかざす。

オレンジ色の明かりを照り返す珠。太陽の光の下で見たなら、月の光のようにほのかに輝く乳白色に見えただろう。

それは大粒の真珠だった。

「おかあさん」

舌足らずの言葉で、女の顔を見上げ尋ねる。

女は愛情を湛えた微笑みを返し、少し首を傾げてみせる。

「これはどうやってできるの？」

真珠を指でつまみ、女に差し出す。

「これはね」

答えながら、幼子の指の間からこぼれた真珠を空中で受け止める。

「海の中の貝から採れるの」

重ねて問いを投げてくる幼子の手に真珠を返して、そのまま幼子を抱いて立ち上がった女は、入り口に下がった織物をどけて外に出る。

晴れ渡った夜空の中天に輝く満月の周りには、沢山の星々が華を添えていた。

「ほら、お月様はいつも、ああして私たちを、見ていてくれているでしょう？ いつも空から見るとね、たまに、とっても哀しいものを見るときがあるの。そんな時お月様は一粒だけ、涙をこぼすの。その涙は海に落ちて、それを貝が大事に大事にしまいこむのよ」

幼子の手にある真珠は柔らかい月光を受けて、本来の輝きに近い灰白さを見せている。

「これはおつきさまのものだから、こんなにおつきさまににてるんだね」

今更ながら、面白そうに真珠を手の中で転がしていた幼子は、ふと新たな疑問を口にした。

「なんで、かいはおつきさまのなみだをしまいこむの？」

「そうね……」

しばし考えるような沈黙。

穏やかな風と波の音だけが聞こえる。

「こぼれた涙の理由を、忘れない為かもね」

女はやさしい溜息について幼子の尻を軽くポンポンと叩き、火の側へ戻っていった。

そんな親子のやりとりを、月だけが静かに見守っていた。

## 一章

### 一章・少女と青年

1

初夏の日差しとはいえ、南国ではそれなりに強い。

夏の初めの太陽は、軽快で純白の光を、海に砂浜に注いでいる。

やや変化に欠けはするものの、それなりに四季の移り変わりがあり、年間を通じて今が一番過ごしやすい。

日差しに負けず白い砂浜が広がり、エメラルドグリーンの海は、水平線に近づくにつれて紺碧へと変わっていく。

カニが波に追い追われしている波打ち際。人影が一つ。

透明度が高い為、実際よりも波打ち際が遠く見える海に、ボロ布を頭からスッポリと被った小柄な姿が立っていた。

太股の半ばまで海につかり、鍬を構えたまま、じっと海を見つめているようだ。暑いだろうに、執拗なまでに肌を見せないようにボロ布を被っているの、顔どころか性別も窺い知れない。

見て解るほど小柄であるところからすると、おそらく子供か女性



であろう。僅かに水面から確認できる太股が、抜けるように白い。

砂浜にしてはやや穏やかな波に揺られるように立っていたその人物の手が動く。

慣れからくる無造作さと正確さを併せ持った鉈は、しっかりと大きな魚を捉えていた。引き上げられた鉈の先で暴れる魚から弾けた滴が、陽光を反射して輝く。

大きい。頭から尻尾まで、大人の指先から肩くらいはある。

その魚が刺さったままの鉈を担いで、ボロ布の人物は回れ右して砂浜に上がった。

水面からあらわになっていく足を、慎重に布で隠しながらである。見る限り、やや白過ぎはするかもしれないが、大きな傷もなく、足に目に見える問題があるとは見えない。

辺りの見える範囲に他の人影はなく、人目を避ける以外の理由があるようだった。

そのまま、まっすぐ砂浜を突っ切り木陰までやってくると、魚を地面に置き、無造作に足をかけて鉈を引き抜き、魚の首と尾に一撃ずつ入れ、血抜きをする。

「サラサ」

血抜きが終わるまでの間、ぼうつとした雰囲気で見えていたボロ布の人物が、不意に背後からかった声に、警戒した様子で振り返った。

「よう……その、久しぶりだな」

赤銅色に日焼けした顎の左側に縦の古傷が走った、精悍な顔立ちなのにどこか人の良さそうな青年が、少しぎこちなく笑っていた。

気弱なわけではないのだろう。青年の引き締まった身体からは、弱気とは無縁の強い精気が感じられた。

「……だれ？」

青年に返されたのは、愛想も素っ気もない冷ややかな少女の声。相手が嫌いだとか、そういうこと以前に、本当に誰なのか判らないようだった。

つかの間寂しそうな顔をした青年は、それでも気を取り直して言葉を重ねた。

「しょうがないか、もう何年も会ってないからな。オレも背が伸びたし、多分印象も変わっただろうし。……ザンだ」

「ザン……？」

訝しげに首を傾げた少女・サラサは、それが誰なのかすぐに思い至ったのだろう、ボロ布の上からでも判るくらい、はっきりと顔を背ける。

「……あんた、生きてたんだ。どっかで野垂れ死んだんだと思ってたわ」

砂浜の暖かい日差しとは対照的に、肌が泡立ちそうな程、さらに冷たい声だった。

「今日、帰ってきた」

ここで退いたら、先はないと思ったのか食い下がるザン。

だが、サラサはまるでザンのことが見えていないように、血抜き  
の終わった魚のエラに指をひっかけ、銚を肩に担いでくるりとザン  
に背を向ける。

「サラサ！」

その背を追って、歩踏み出そうとしたザンに、ぴたりと銚の先端  
が突きつけられる。

「一つだけ言うておくよ」

吹き抜ける潮風が、サラサが被ったボロ布を揺らす。

ほんの一瞬垣間見えたのは、ザンを睨みつける血色の赤い双眸。

「あたしに関わるな」

斬りつけるような口調で言い捨てて、拒否の意志を漲らせた背中  
を向け歩き去る。

ザンは、サラサの小さな背中が見えなくなるまで、ずっとそこに  
立っていた。

波の音と、濃い潮の香りを含んだ風が吹き抜けた。

2

そこは海の近くにある村だった。

それなりに村としては大きいものの、取り立てて近隣の村に比べ特産品があるわけでもなく。よくあるような村と言っていていいだろう。

村の近くにある岬にちょっとした伝説があったり、風光明媚な景色も多いが、それとて特別珍しいというほどのものではない。

ザンの生まれ故郷であるその村は、人口約二百人。やや田舎臭くはあるが、長所がない代わりに、イヤなところもない。

ザン自身には含むところもあるが、それでも久しぶりの帰郷ということになれば、感慨もある。

直接帰ってくるのは実に七年ぶりだ。それだけ時間がたてば、いくら田舎だろうと風景も変わる。変わらないのは、風景だけだ。

いや、変わっているのだろう。変わらなく感じるのは、多分に感傷が混じっているからか。

昔には、あんな連中いなかったはずだしな。

村のほぼ中心にある、集会場を兼ねた広場にさしかかったザンは、そこでたむろするあからさまに人相の悪い三人組を視界にとらえて溜息をついた。

ザンに見覚えがないということは、流れ者が随分昔に村を出た出戻りだろう。

その連中がザンを見つけ、見るからに因縁をつけてくるつもりで近づいて来るのを眺めながら、さらにもう一度深く溜息をついた。

「おうニイちゃん、ここら辺じゃみねエ顔だな？」

一番先頭の無精髭の男が、陽もまだ高いというのに酒臭い息を吐きながら、柄の悪い態度でザンをじろりと睨めつける。

「まあそうだろうさ、たった今帰ってきたばかりだからな」

サラサとのやりとりはついさっきのことだ。ザンは好んで他人に喧嘩を売るほど好戦的な人間ではないが、さすがに多少気分が荒れていたのだろう。

言ってから、しまったなと思ったが後の祭りだ。

「てめえ、口の利き方を知らねえみてえだなあ！」

案の定、一瞬で頭に血を昇らせた無精髭の男が、ザンの胸ぐらに掴みかかる。

ザンは顔色も変えずに、掴んできた右手首を掴み、同時に強烈な足払いをかけた。

素早い、あまり力を入れて蹴ったように見えない足払いは、喰らった男をザンに掴まれた右手を中心にくるりと回転させた。

重力を無視して、間の抜けた無精髭の顔が上下逆になる。

そのまま頭から地面に落ちそうになったところを、ザンが男の首につま先を引っかけて、頭から叩きつけられるのだけは回避させる。

どしゃ！ と男の体が地面に落ちる。

頭から落ちるのだけは逃れたが、結構な勢いで叩きつけられた男は、ひとつ呻いて動かなくなった。

あまりに鮮やかなザンの手際に、残った二人の男は怒るよりも先に呆然となってしまった。伸びてしまった男に駆け寄ることもせず、立ちすくむ。

ちらりとザンが目を向けると、特に睨んだわけでもないのに、エビのように慌てて後ずさる。

そのみつともない姿に、下らない事へ関わってしまった自己嫌悪も併せて、ひどく虚しい気分になり、ザンは無言で歩き出した。

男たちはそれを遮りもせず、さらに慌てて道を空ける。

しばらく歩いたところで、ザンの背中に罵声が浴びせられた。一応振り向いてみると、二人がかりで伸びた男を抱えて、男たちが逃げていくところだった。

つまらないものを見たとはかりに鼻の頭に皺を寄せ、ザンは広場に面した他の建物とは雰囲気の違い一軒家にむかう。

「婆様、いるか」

ドア代わりの複雑な柄の織物をくぐり、声をかける。

「いるよ。入っておいで」

しわがれた声がすぐに返ってきた。

促されて中に入ると、薄暗い内部は外と隔絶されているかのようにヒンヤリとした空気が満ちていた。

その中心に据えられた小振りな卓の向こうに、黒い紗のシヨールを被った老婆が座っていた。その目の前には、琥珀に似た半透明の珠が、青い袱紗の上に鎮座している。

「直接会うのは久しぶりだね。いい男になったじゃないか」

いくつか歯の欠けた口元を緩めて、老婆は孫を見るような笑顔を浮かべる。

「確かに身長は伸びたけど、中身はどうだな」

ザンも笑顔を返しながら卓に近づくと、老婆の正面に座る。

「免状は？」

尋ねる老婆に、ザンは懷から封蝋をされた封筒を取り出して渡す。

懐から取り出した小刀で封蝋を破り、中の書類を取り出して一通り眺めた老婆は、ザンに目を戻して、また笑みを浮かべた。

「大したもんだね、あんたは」

卓の上に封筒と書類を重ねて置き、両手を組んでそこに顎を乗せる。

「あんたの望み通り、アタシの知ってる限りで一番厳しい師匠のところ放り込んでやったつてのに、ちゃんと免状もらってきたとはね。結構本気で、すぐに逃げ出すだろうと思ってたんだがね」

「何回か死んだと思ったけどな。逃げたところで、どうなるわけでもなし」

「ちゃんと？ 守人<sup>もりびと</sup>？ の委任状も持ってきたね。よしよし」

頷いて立ち上がった老婆は、部屋の隅にある行李を開けて、中から一振りの長剣を取り出した。比較的新しい革の鞘に収まった剣の、細かい彫刻が施された鍔には、卓の上の珠と同じ輝きの宝石がはめ込まれている。鞘に比べて、剣本体は随分使い込まれた雰囲気で、歴戦の傷が散見できた。

「この剣は身分証明を兼ねてる。鞘と柄巻きは新しくしといたよ、大事に使いな」

「……ああ」

神妙な顔で両手を差し出し、大事そうに受け取って感慨深げに目



を閉じた。

「さ、これであんたはこの村の守人だ。精進おし」

よつこらしよ、と声をかけて卓に着いた老婆は卓上の珠に手をかざして訊いた。

「せつかくだ。あんたの運勢でも占ってやろうか？」

「いや、それよりも、オレが村を離れていた間の話を聞きたい」

「……もうサラサには会ってきたのかい？」

「顔も見せてくれなかったし、話もできなかったけどな」

「まあ、そうだろうね。お前さんなら、話くらいできるかと思ったんだがね」

ふーっと、長く溜息をついて老婆は天井を見上げる。

「前から大して村の連中と仲が良かったわけではないんだが、母親が死んでから尚のこと頑なになっちまったからねえ。仕方がないとは思うが。アタシが仲介できれば良かったんだが、アタシら詠人よみびとは中立の立場を守らなきゃいけない掟だ。……薄情だとは思うがね」

「オレが血反吐はいていた間も、状況を送ってきて貰ってたからな。オレにとってはそれで十分だったよ」

「あんたに対してはね。あの娘に対しては義理を欠くにも程があるさね」

自嘲的に肩をすくめた老婆は居住まいを正して、口を開く。

「幸い、ここ何年かは凶作も魔物の襲撃も無かった。あの娘の母親が死んだ流行病の時も、さほど広がらずに済んだからね。さすがに昔の一件は、連中も罪悪感があるんだろうさ。ほとんど騒ぎもなかったよ」

「……………」

「そんな調子でね。今、村でまともにサラサが相手するのはナオだけさ」

なんとなく、場が湿っぽくなってきたのを感じたのか、ザンが話を変える。

「さっきすぐそこで、三人組のチンピラに絡まれたんだけど、あいつらは？」

「ああ」

鼻の頭に皺を寄せて、老婆は嫌悪感をむき出しにする。

「最近村に戻ってきたロクデナシどもさ。ここがイヤで出ていったくせに、都会でなにか失敗したんだか犯罪でも犯していられなくなつたんだか。出てつたのは十年以上は前の話だから、お前さんには見覚えが無いかもね。村の連中はあんなでもなにかあつたら役に立つんじゃないかと思って放置してるみたいだがね」

「たった今、人目のあるところで伸してきたばかりだから、役に

立たないって話はすぐに広まると思うな」

さらりと口にしたザンに、老婆は声を上げて笑った。

「そりゃ良い薬だね。周りが黙ってるのを良いことに、かなり好き勝手してたからね」

「戻ってきた早々、買わなくてもいい恨みを買った気もするけどな」

「なに、連中は根っからのチンピラさ。ガツンとやられたからって、やり返そうってほどの根性は無いだろうさ。魔物と戦うのが仕事の守人相手に喧嘩売ろうなんて、多少はまともな頭があれば考えないだろうよ」

「だといいけどな」

「じゃ、話のついでだ。坊やの修行の成果を見せてもらおうかね」

楽しそうに言って老婆が卓上の珠に手をかざすと、室内の闇が濃くなった。

一瞬バツの悪そうな顔をしたものの、ザンは立ったまま黙って両手を宙に差し出す。

ふーとザンが息を吐くのと同期して、両手のひらに陽色をした燐光がうつすらと見え始めた。

「以上」

ザンが早口に言って両手を広げると、あっという間に両手の燐光

がかき消える。

「なんだい、そんなもんかね？」

拍子抜けした口調の老婆に、子供のように口を尖らせてザンは言い訳する。

「無茶言うなよ。十年修行したって、キラとも破魔の光が出ない奴だっているんだ。師匠みたいに、部屋中照らすみたいな真似が、先はともかく免状貰ったばかりのペーペーにできるわけないだろ」

「ま、そりゃそうかね」

あつさり言って、再び老婆が珠に手をかざすと、部屋に明かりが戻る。

「その程度でも武器に通すに十分だろうから、問題は無いかね。そういや、家には顔を出したのかい？」

「……出さなきゃ、駄目かな？」

「そりゃね。あんたが村を出たときには、村長には散々文句を言われたからね。あんたも少しは言われてきな」

「ザンが帰ってきてるって?!」

意地悪く老婆が笑ったところで、勢いよく入り口の織物を跳ね上げて、小柄な人影が飛び込んできた。

「なんだい、はしたない！」

間髪入れず老婆に一喝されて首を竦めたのは、ザンと同じくらいか少し下の年頃で、小麦色の肌が健康的な少女だった。

「あう。ごめんなさい、ババ様。ザンを見かけたって話を聞いて、ここにいないんじゃないかって……」

「相変わらず元気みたいだな、ナオ」

「ザン！」

しおらしくしていたのはほんの一瞬で、ザンの姿を視界に納めたナオは、跳ねるようにザンの胸に飛び込んだ。

「帰ってきたのね！」

「おう、でっかくなっ たなあ。オレが村を出た頃は、あんなチビッコだったのに」

微動だにせずナオを受け止めたザンは、片手でナオを支え、もう片手で小さな頭を撫でた。

「あたしだつて、もう十六なんですからね！　いつまでも子供じゃないんだから！」

「あつはつは。そりゃ悪かったな」

頭を撫でる手を軽くのけて、可愛らしく頬をふくらませるナオに、親しみ深い笑みを見せながらザンは老婆に顔を向けた。

「んじゃまあ、親父のところに顔出してくるよ。多分大喧嘩になる  
とは思っけど」

「そこら辺は、あんたの家の事情だからね。好きにするといいさ」

意地の悪い笑みを浮かべて頷く老婆。

「じゃあ、あたしが案内するね」

「終わったら、一度こっちに戻ってきなよ」

村出身のザンに案内などいらなだろう、というような野暮も言  
わない老婆に見送られて、ザンとナオは老婆の小屋を後にした。

「オレがいない間、サラサの面倒をよく見てくれてたみたいだな。  
ありがとう」

並んで歩きながらザンが礼を言つと、ナオが不思議そうに首を傾  
げた。

「サラサは友達なもの。なんで、ザンがお礼を言っの？」

「いや……」

心底不思議そうナオに奇妙な違和感を覚えたものの、そのはっ  
きりしない感覚を問いただせるほどの確信が無かったザンは適当に  
言葉を濁して、話題を変える。

「婆様の手紙に書いてあったけど、詠人の勉強してるんだって？」

「うん。そのうち、王都へ留学することになるんじゃないかな。えへへ、詠人になったら、ザンと一緒に仕事できるかもね」

「この村には、婆様がいるだろ」

冷静なザンの言葉に、ナオが口を尖らせる。

「婆様もお年だし、引退もそう遠くないと思うわ。そうになったら、あたしがなつてもいいじゃない」

「あの婆様が簡単に引退するか？ あの人、オレらが子供の頃から変わらないけど、ちゃんと年取ってるのかね」

そんな他愛のない会話を交わしながら歩いていると、すぐに周辺では一番大きな屋敷へと辿り着く。

「じゃあ、また後で来るから、おじさんと仲直りしておいてね」

「簡単にいうなあ……つか、多分仲直りなんかできねえと思うけど」  
顔をしかめた言葉の後半は、踵を返して走り出したナオには届かなかったようだ。

多分、改めて言い渡されそうな気がするが、そうになると寝泊まりするアテが無いことに今更ながら気がつく。村長の意向に背いてまで、手を差し伸べる者はいないだろうし、

ザン自身もその程度の事で他人に迷惑をかけたくない。

「まあ、野宿でなんとかしのぐか」

重い足取りで、ザンは屋敷の門をくぐった。

「今更どの面下げて帰ってきた」

六年ぶりに再会した、村長でもある父親からの第一声はそれだった。

はつきり言つて、郷愁に駆られて帰ってきたわけではないので、特別怒りも失望も湧かなかった。

久し振りに見た父親は、少し老けて見えたが、その中身は別れた時から何も変わっていないように感じた。指導者というのは安定感も求められるのだろうから、変わらないというのも役割的美徳なのかも知れないな、と顔を背けて怒りを見せる父の顔を、冷めた頭でぼんやり眺めた。

母親が一步下がり、時折取りなし口を挟むが、大して効果を上げてはいないようだ。一通り言いたいことは言ってしまったのか、父親は最後の一言を発した。

「この家にお前の居場所などないぞ！」

「別に構わねえよ。オレは守人としてこの村に戻ってきたんだ。最初からこの家に戻ってきたわけじゃない。新しい守人として、村長サマに挨拶に来ただけだ」

思ってもいなかった発言だったのか、父親は鼻白んだ表情で一瞬



黙り込み、ザンの傍らに置かれた長剣に初めて気がついて顔色を変えた。

「お前……」

「そういうことだよ。お互い顔を合わせて楽しいわけじゃねえだろ。なんかあったら、婆様を通してくれ。じゃあな」

絶句している父親をおいて、さつさと立ち上がるザン。目の端でオロオロしている母親も見えないふりをして、そのまま家を出る。

「さて、今晚からどうするかな……」

頭を掻きながら、ぶらりとザンは歩き出した。

### 3

その頃、サラサは浜辺まで戻ってきていた。

間の抜けた話だが、先ほどは思わぬ再会をしてしまったせいで、待ち合わせの約束があったのを忘れて立ち去ってしまったのだ。

一応、まだザンが居残っていないのを確認しつつ、どこか慎重な野生動物のような雰囲気、日陰を選びながら大きな木の下までやってくると、ボロ布の裾を払って腰を下ろす。

陽の高さを確認すると、約束の時間を多少過ぎているようだが、辺りには約束相手の姿は見えない。相手の性格からして、先に来てしまい、サラサがないからといってすぐに帰ってしまうとは考えにくいので、おそらく遅刻しているのだろう。

別に急ぎの用があるわけでもないサラサは、木の幹に背を預けて海を眺めつつ待った。

白く青く姿を変える波は、飽くことなく、絶えることもなく繰り返して寄せている。

眼を閉じれば、潮騒だけが耳の奥をくすぐる。

優しいその音に身を任せていると、そのまま世界に溶け、薄れて消えていくような感覚に陥っていく。

そのまま身体が溶けて、消えてしまえばいいのに。

優しい感覚とは裏腹に、思い浮かべるのはそんなこと。

意識を他に移そうとしても、辛いことしか思いつかない。

楽しい思い出もあるが、それを塗り込めてしまっほどの、哀しい思い出ばかり。

潮の香りを含んだ柔らかい風が、目先の布を揺らす。

なぜ、生きているんだろう。

泡のように意識に昇ってくる思い。

自分を愛してくれた両親は、もうこの世にはいないのに。

辛いのに、哀しいのに、なんで今ここにいるんだろう。

取り留めのない思いは、堂々巡りを繰り返し、霞のように消えていく。

やがて、新たに浮かんできたのは、顎に古傷のある浅黒い若者の顔。少年の頃の面影を色濃く残していた顔。

布の下で、サラサは顔を歪めた。

何で今更。

全部、心の中に押し込めて忘れたつもりだったのに、思い出してしまった。

その顔は、サラサがどんなに努力しても、脳裏から離れてはくれなかった。

薄汚れた布の下でサラサがどんな顔をしているのか。

辺りに人影はなく、物言わぬ木々ときらめく太陽の光だけが浜辺に踊り、潮騒が辺りを満たすのみ。

休み無く波が打ち寄せる。

「ゴメンね、遅れちゃって。待ったでしょ？」

どれだけ時間が経ったのか、サラサには聞き慣れた声が黙想を破る。

顔を上げると、健康的に日に焼けた可愛らしい顔が笑いかけていた。

「急な用事ができてね。ちょっとバタバタしちゃった」

「別に急ぎでもないから、気にしないでいいよ」

ザン相手の時とは全く違い、親しみの深い声で返し、サラサは居住まいを正す。

「じゃあこれ、今回の品物ね」

サラサに笑顔を向けて、ナオは肩に担いだ背嚢を砂の上に下ろした。

「……いつもありがとうね、ナオ」

「なに言ってるの、あたしたち友達じゃない。遠慮なんてしないでよ。それより、荷物の中身確認しなよ」

「うん」

サラサは素直に頷いて背嚢を引き寄せると、中身を一つずつ取り出していく。次々と油紙の包みや紙束、丸めた布などの雑貨が取り出される。

それらは、どうしても自給自足の利かない諸々の生活必需品だっ

た。

一つ一つ丁寧に吟味して、また元通りに詰め込む。

「確かに。それじゃあ、これね」

隣に座り込んで作業を眺めていたナオに、サラサは小さな革袋を差し出した。

黙ってそれを受け取ったナオは、袋の口を開けて中から一つを摘み出した。

「うわゝゝ、今回のもかなり質がいいねえ」

日の光を淡く照り返すそれは、大粒の真珠だった。袋の膨らみを見る限り、同じ程度のものがもっと詰め込まれているようだ。

摘んだ真珠をかざしてみながら、ナオは感嘆の吐息を漏らす。

「よくこんなの見つけられるよね。村で腕のいい人でも、こんな立派なやつ採ってくるなんて滅多にないよ？」

「人魚岬の辺りには誰も潜らないから。わたし一人が採るくらいなら、いくらだってあるよ」

「そういえばさ、昔からあそこには人魚が出るって聞かされてきたけど、見た事ってある？」

「はつきりと見たことはないけど、ひょっとしたらあれがそうかな？　っていうのなら、何度か見かけたことはあるよ」

「ほんとうに?！」

「気のせいかもしれないけどね」

この辺りの子供なら、必ず聞かされるおとぎ話について一通りの雑談を交わしたところで、ナオがはたと膝を打った。

「あ、そうだ。前から言おうと思ってたんだけど、真珠の代金、毎回随分余るよ? もっと他に何か欲しいものがあるなら、色々買えるけど。いつも手数料とかいってあたしにくれてばかりじゃなくて、貯めるとか」

ナオの提案に、サラサは黙って首を横に振った。

「いいよべつに。自分ではお金に換えられないし、貯めたところで使い道もないし。それより、ナオの方が勉強の為に本を買ったりしないといけないから、物いりでしょ。ナオが役に立ててくれれば、わたしも嬉しいからさ」

他の誰にも見せない優しい表情で、ナオの提案をやんわりと断る。

「ん〜……。でも、なにか欲しい物があつたら、いつでも言っ  
ね。こっちでお金貯めとくから」

納得いかない様子ながらもナオがそう返すと、サラサは笑って頷いた。それを見たナオが、不意に何かを思い出した様子で両手を叩いた。

「あ! そうそう、そういえば! 聞いてよサラサ、ザンがね帰っ

てきたの！」

「……ふうん」

一瞬判断に迷った感じで間を開けて返事を返す。だが、その間の意味にナオは気がつかなかったようで、気のないサラサの返事に頬をふくらませた。

「ふうんって、それだけ？」

「それだけ？　って言われてもね……」

「だって、ザンだよ？　八年も村にいなかったザンが帰ってきたんだよ。新しい守人になって！」

今度こそ、見て解るほどサラサが動揺を見せたが、それでも興奮しているナオは気がつかない。サラサはすぐに動揺を引っ込めると、また冷たく淡泊な反応を返す。

「……へえ」

「へえって、あのねえ」

「だって、わたしは村に行く用事ないから顔を合わせることもないだろうし。関係ないもの」

「なんで村にこないって断言するのよう」

ますます頬をふくらませるナオに、笑いを含んだ声でサラサは言った。

「ナオに、迷惑かけたくないから」

あっさりと返す言葉に、頑固な意志を感じて感じて、ナオは言葉に詰まる。

しばらく、むずがる子供のように握り拳をバタバタ振っていたナオは、ややあつて右手を砂の上についた。

「うゝゝ、でも、あたしの結婚式の時には、ちゃんと村まできてね！」

「結婚？ ナオ、結婚するの？」

突然振られた話題に、サラサが驚きの声を上げる。

それほど頻繁とは言えないものの、それなりの頻度で顔を合わせているが、そんな話は一度も話題になったことは無かったからだ。

サラサの驚きに満足したのか、ナオは恥じらいに染まった頬に手を当てて頷いた。

「うん。まだ正式に決まったわけじゃないんだけどね」

「そうなんだ。おめでとう。それで、相手は？」

「あのね、ザンとなんだ」

「え………?」



予想もしなかった名前に、サラサはボロ布の内側で硬直するが、やはりナオは気がつかず嬉しそうに続ける。

「何年か前に、ザンの消息がわかった頃から、話があったんだって。お父さんたちの間ではほとんど決定みたいなもので、後はザンに話をするだけだって。あたしも、つい最近聞いたばかりで驚いたんだけど」

「……そう」

見事なまでに感情の消された声だった。それをサラサの感心の無さと感じたのか、ナオは膝を寄せてサラサの手を取った。

「だから、ね？　お願いだから、そうになったらサラサもちゃんと来て欲しいの」

「……考えとく」

やはりというか、あまり色のいい返事ではないことに、ナオはやや不満そうだったが、今はそれでいいと思ったのか、本当にお願いな、と念を押して立ち上がった。

「そんなわけで、今日はちょっと忙しいから、これで帰るね」

「うん……」

「またね」

手を振って去っていくナオに、サラサは軽く手を挙げて答える。

ナオの背中が見えなくなるまで見送り、溜息を一つついて立ち上がる。

しばらくぼうつと水平線を見つめたまま、サラサは波の音を聞いていた。

別に隠すほどの事ではなかったはずだが、ザンがサラサに会いに来ていたのを、ナオに伝えそびれてしまった。

なんとなく居心地の悪い罪悪感があったが、いましがたに聞いた話と一緒に腹の奥に押し込めて、それ以上考えないことに決める。

歩き出したサラサが踏みしめる熱砂は、革のサンダル越しでも酷く暑かった。

勢いで実家を後にしたものの、特に行く当てを決めていたわけではないザンは、村の中を適当に歩き回っていた。

特にあてもなくぶらぶらと歩きながら、ふと父親の事を思い出す。

久し振りにあった父親は、記憶にあるよりも随分小さかったような気がする。

考えてみれば八年前に村を飛び出してから、ザン自身がもっとも

心と身体の成長著しい期間を離れて過ごしたのだ。身心共に、変化を感じて当たり前だ。

覚えている昔の父は見上げるように大きかったし、村長という責任ある立場にあるせいも、威厳があったと思う。

だが、今日見た父親は、身長そのものはザンより頭半分低かったし、白髪も増えて年寄りめいていた。

ザンが成長した分、父親が年をとった。それだけのことだ。

正直に言って、ザンは父親が好きではなかったが、それでも記憶の中にいるのとは違う父の姿に、言いようのない寂寥感を感じたのも事実だった。

昼をいくらか過ぎたぐらいの時間である。

日差し強い時間帯には、村人は屋内で仕事をしているか、夜の漁に備えて休んでいるかのどちらかで、嵐避けの石垣に沿って踏み固められた道に人影は無い。

もう少し話してきても良かったかな。

ほんの少し後悔しないでもないが、やはりすぐに切り上げて良かっただろうと思ひ直す。どうせ、多少長く話したとしても最後には喧嘩になるだろう。

いろんなものが変わったのに、変わらないものもある。

変わらなければいけないものほど変わらず、変わって欲しくない

ものほど駆け足で変わっていく。

父は後悔していないのだろうか。

いや、例えていたとしても、認めはしないだろう。

立場もある、守らなければならないものもある。罪悪感など持っている余裕などないのかもしれない。

責めるつもりは不思議なほどザンには無い。だからといって、積極的に認めるつもりも無い。

昔、村を飛び出した時は父親に対して怒りしか持っていなかった。

怒りはもちろんいまだにあるが、それよりも深くザンの心を支配しているのは、哀しみと寂寥感だった。

つらつらと考えながら坂を上ったザンの眼に、屋根だけがある作業場から立ち上る仕事の煙が見えた。

そこで作業している人物を目にとめたザンの顔が明るい表情に変わり、ザンはその作業場に向けて足を速める。

やがて見えてきた作業場は、突き固められた黒い土が剥き出しで、ぱっと見で粗末な印象を一瞬受けた。

だが、使い込まれた火床ほじにファイゴ、年季の入った金床。必要なものが必要なところにある、洗練された仕事場だというのは部外漢のザンでも見て取れる。

その中心、横座と呼ばれる浅い穴の縁に腰掛けて一心不乱にヤスリを使っているのは、ザンと同じ年頃の丸顔に無精髭が生えた中肉中背の男だ。

余程作業に熱中しているのだろっ、見通しのいい作業場だというのに、ザンがすぐ側までやってきても顔を上げない。

「忙しそうだな、ブギ」

「ん？」

ザンが親しげに声をかけて、ようやく顔を上げる。

「おお。なんだ、ザンか。ちょっと待ってろ、一段落つけちまうから」

村を出て以来、手紙のやりとりはしていたが、直接顔を合わせるのも八年ぶり。今日戻ってくるのも伝えてなかったはずだが、まるで昨日別れたばかりのように平然とした対応でザンは苦笑いする。

しばらく黙ってブギが作業を待つ。

金属が金属を削る音だけが少しの間続き、やがて手を止め、削っていた銚にまわりつく鉄粉を吹き飛ばし、角度を変えて何度か確認してようやく満足したのか、地面に敷いた革の上にポンと銚とヤスリを置いたブギが横座から立ち上がる。

「待たせたな」

「もちつと感動してもらえと思ったんだがな」

「うわあ、久し振りだなザン！ 元気で何よりだ！ 感動した！」

あからさまな棒読みで、大げさな身振りをつけて言うブギに、ザンはさらに苦笑いを深める。

「変わらんな、お前は」

「まるつきり音信不通で、完全に行方不明だったってんならともかく、この前守人の資格をもらったって手紙寄越したじゃないか。だったら、すぐにでも帰ってくるって予測ぐらいつくさ。ま、とりあえず」

親愛の笑みを浮かべたブギが鍛冶仕事で鍛えられた手をザンに差し出した。

ザンがその手をとる。

「おかえり」

「ただいま」

誰よりも会いたかった相手に、両親にも言ってもらえなかった言葉に、ザンは少し複雑な表情を浮かべる。

ブギが空いた方の手で、ザンの肩を優しく叩いた。

「しかし、本当に守人になって帰って来るとはなあ」

村名産のクセの強い果実酒が満ちた杯を傾けて、ブギがしみじみと口にする。

陽はかなり傾いてきたものの、まだ暗くなるには間がある。

作業場の片隅に、小さな作業台と、長方形の板を使ってでっち上げたテーブルの上には何種類かの料理が並べられている。

酒を飲むにはやや早い時間ではあるが、ブギは暗くなってから火入れの作業がある為、早い時間からの酒宴になった。

「昔っから、妙に頑固なところのある奴だと思ってたけど」

やや赤みの差した顔で、腕組みをしながら何度も頷く。

もともと人懐こい達だが、適度に酔いが回ってきたおかげで、さらに陽気になってくる友人を微笑ましく思いながら、ザンが訊ねる。

「そっついや、親父さんはどうしたんだ？」

「オレに鍛冶仕事を譲って、村の反対側に家建てて、魚採ったり畑耕したりでのんびりやってるよ。別にオレは同居でも良かったんだがな」

「新婚だから気を遣ってくれたんだろ。手紙で聞いてはいたが、どれくらいたつんだっけ？」

「三ヶ月かな」

酒の肴をもう一品持つてやってきた、やや地味だが健康的に日焼けし、育ちの良さそうな妻から肴を受け取るブギ。夫婦共に幸せそうな雰囲気溢れていた。

母屋に戻っていく妻の背中を眺めて、ブギはザンに目を戻した。

「で、お前さんの修行ってどんなもんだったんだ？ 噂じゃとんでもなく厳しいらしいじゃないか、守人の修行っていうのは」

「何度か死にかけたけどな」

修行の日々を思い出し、ザンはうんざりと溜息を吐いた。

「陽が昇る前に起き出して、朝飯まで延々と走り込みから始まる。一応三食は出るんだけど、それ以外の時間は大げさでなく全部基礎鍛錬。それがまず四年続いたな。同じ時期に弟子入りした連中は、大半ここで挫折したよ」

「基礎鍛錬ってのは？」

「まあ体力作りと、剣術の基本、素振りってところかな。そればかりやらされた」

ブギから杯を受けて、話を続ける。

「何回やったら終わりってんじゃないくて、できる限りやらないといけないんだ。楽しようとするとあっさり師匠にバレるんだけど、別に怒りもしないで『出て行け』って言うだけなんだよな。それが怒られるより恐ろしくて、夢中でやったなあ。でも面白いもんで、調子が悪くて数がこなせない時には何も言わないし、怪我したり体調



を崩した時には、しっかりと治療をしてくれたんだ。こっちが必死にやってる限り、決して雑に扱ったり見放したりはしない人だった。取りあえずの修行が終わったから言えるのかもしれないけど、いい師匠だったんだと思うよ」

くつと杯を傾け、ブギの杯にも酒を足してやる。

「それから、基礎鍛錬が充分と判断された奴から『破魔の光』を練る為の修行に入るんだ」

「守人になる為の最低限の条件だったっけ？」

「ああ。守人の総数がそれほど多くないのは、『破魔の光』を身につけるのに多少の素質が関係するのと、その修行の過程で命を落とす確率が少ないからなんだ」

ブギが料理を小皿に取り分けて差し出すのを受け取り、ザンは料理を一口放り込む。

「ハナから手加減を母親の腹に置き忘れてきたんじゃないかと思うような人だったけど、師匠の指導はさらに激烈なものに変わってなあ。……オレ、本当によく生きてたな……」

なにやら遠い目になってしまっザンだった。

「確か婆様の紹介で弟子入りしたんだよな。どこもそんな厳しいものなのか？」

「いや、俺が頼んだんだよ。一日でも早く村に戻ってこれるようにさ。……まあ、後悔しなかったかというと、微妙だよな」

苦笑いして空になった杯を手の中で転がす。

「でも、オレはやり遂げた。やり遂げて、帰ってきたんだ。今度は、あいつをあんな目に遭わせない。オレがあの人への代わりに、あいつを守るんだ。絶対に。……もう、泣くだけだったガキじゃないんだ」

無意識に力がこもった手の中で、焼き物の杯が微かに悲鳴を上げた。

「あんまり力を入れるなよ？ 杯が砕けちまう」

「お、ああ、と。すまん」

慌てて手から力を抜く幼なじみを優しい目で眺めつつ、酒を注ぐとしたところで、酒瓶が空になっていることに気付く。

母屋に追加を取りに行こうとブギが腰を上げると、ちょうど妻が新しい酒瓶を持ってくるところだった。

「今日は気前がよくて、なんだか後が怖いな」

ブギが立ち上がって笑顔で酒瓶を受け取り、戯けて言つと。

「失礼ね、なんだかいつもは気前が悪いみたいじゃない。久し振りの、お友達との再会でしょう。野暮なことは言わないから、今日は楽しむといいわ」

「ありがとう、ヨナ、愛してるよ」

「調子いいわね」

片手で腰を抱いてささやくと、浅黒く日焼けした顔に微笑みを浮かべ、ザンにも黙礼を送ってまた母屋へ戻っていく。

「お前、よく恥ずかしくないな」

「なにを。愛し合って結婚したんだ。愛をささやくことに、なんの抵抗があるか」

多少呆れた調子でザンが言うと、そろそろいい具合に酔いが回ってきたか、ブギは笑いながら大仰に両手を広げた。

「ま、实际いい女だよ。俺の道楽に文句一つ言わないし、料理もこの通り美味しいしな」

「そりゃわかるけどな。どうやって知り合ったんだ？ 見覚えがないけど、この村の出身じゃないだろ」

卓上の料理に手を伸ばしながらザンが訊ねる。

「見合いだよ。隣村の出身さ。そっいゃ」

ブギはストーンと席に座り直して正面からザンを見据え、酒を注いでやりながら真顔で切り出した。

「お前、ナオと結婚するって本当か？」

「は?!」

驚いた拍子に手元が狂い、杯から酒が溢れる。

「なんのことだ、それ？」

「ああ、やっぱりお前は知らない話なんだな。なんかお前の親父とナオの親父が、少し前から準備を始めたとか聞いたんだが、おかしいと思ったよ。一応、実家には寄ったんだろ？ 何も話を聞かなかったのか？」

「寄ったは寄ったけどな、あつという間にケンカになって、話らしい話なんかしなかったよ」

「そっくりだな、お前ら親子

「ほつとけ」

「で、どうなんだ？」

「なにが」

「ナオと一緒になるつもりがあるのかって話だよ」

「わかってて訊いてるだろう、お前……」

低く唸りつつ半眼でブギを睨むと、ガシガシと乱暴に頭を掻く。

「あいつはオレにとっちゃ妹分なんだ。そうとしかみれないし、結婚なんざ論外だよ」

「そうだろうなあ。一応本人の口から聞いておこうと思ってな。悪

く思っな。しかしまあ、ナオはガツカリするだろうっなあ」

「……ナオは乗り気なのか？」

「昔からお前の後ろばかりついて歩いてたからな。そういう気持ちもあつたんじゃないか」

深々と溜息を吐いて天を仰ぎ、動かなくなるザン。

「お前にゃ昔から麗しの姫君がいるんだものな。命を捨てても悔いのないって相手がさ。惚れてるんだろ？」

「……そんなんじゃないよ」

「違うのか？」

問い返されて、しばし顎の傷へ無意識に手を伸ばしながら黙り込む。

「……わかんねえ。わかんねえけど、な。オレ、おじさんみたいに、何かを守る力が欲しかったんだ。自分が無力で、泣くしかないのは、嫌だったんだ」

「そうか」

ボソボソと途切れ途切れの告白。ブギは頷いて、酒瓶を差し出す。

「ま、飲め」

「ん」

しばらくお互い黙って食を進めていたが、頃合いをみてブギが口を開いた。

「サラサには会ってきたのか」

一瞬だけザンの手が止まるが、すぐに食事と酒の消費に戻りつつ答える。

「ああ」

「なにか言ってたか？」

「自分に関わるなつてさ」

「ん〜、もともと人付き合いが多いわけじゃなかったが、おっかさんが亡くなってからは、ほぼ皆無に近いしな。ナオくらいしか村との接点が無いんじゃないか？ 人間嫌いもひどくなってるみたいだし。わからんでもないけどな」

「婆様も同じことを言ってたよ」

「サラサのおっかさんが無くなった時、お前のところにも連絡はいったよな？ もしかしたら帰って来るかと思っただんだがなあ」

片足を組んで頼杖をついたブギが、ほんの微かな非難が混じった口調で言った。

「まあ、お前が帰ってきたところで、なんかの役に立ったわけじゃなかったかもしれんがね」

「……なんだか言葉に刺があるな」

「気のせいだろ。ま、これからが大変なのは間違いないとこだな」

「そうだな……」

また溜息を吐くザンに、ブギは黙って酒瓶を差し出す。

「気長にやるしかないだろうさ」

その後は、お互い湿っぽい話題は避けて、土産話や思い出話にしばし華が咲く。

やがて、夜もふけていい加減に二人とも酔いが回った頃、ザンが席を立った。

「長居しちまったな、そろそろお暇するよ」

大分酒が入ったはずだが、意外としつかりした足取りのザンに比べ、明らかにベロベロ寸前といった風情のブギが、立ち上がりかけたザンの手を掴んで引き留めた。

「お暇するつてオメー、家には戻れねえだろうし、こんな小さな村に宿なんかねえし、泊まる当てなんてねえだろうよ」

「今日は風もないし、雨も降らなさそうだからな。町外れで野宿でもするさ。明日からは……婆様にテントを借りようかと思ってるが」

「遠慮すんな。泊まってけ」

「いや、そりやさすがに悪いだろ」

結婚したばかりと言っていい家に飛び込みで泊まるのはさすがに不躰だと思い、ザンは遠慮するが、それを察したブギが眉をしかめる。

「余計な気を使うなよ。そうは見えないかもしれんが、オレはお前とこうしてまた顔を合わせられたのが、嬉しいんだよ。多分お前が思ってる以上にな。それを追い出して野宿させたなんてなったら、寝覚めが悪くて敵わん」

そう言つて、掴んだ腕を引っぱりザンを座らせる。

抵抗しようと思えばできたが、なんだかそれをするのは悪い気がして、ザンは大人しく座り直した。

「おーい、ちょっといいか」

酔いでヨレた声をかけると、すぐに母屋からヨナがやってくる。

「こいつ、今日は泊まっていくから、準備頼む」

「もう準備してあるわ。眠くなったら、いつでもどうぞ」

「手間を掛けさせて、申し訳ない」

笑顔で言うヨナに、ザンが頭を下げる。

ヨナは笑みを深めて、空いた皿と酒瓶を持参した盆に乗せた。



「いいえ、この人がこんなに楽しそうなのは、久し振りに見るから。よければ、またいつでも遊びにきてね」

「おおい、ザン。ちょっとこい」

ヨナの言葉に恐縮したザンが、さらに頭を下げていると、作業場の隅に移動していたブギが手招いた。

「なんだ？」

「ほいこれ。忘れないうちに渡しとくよ」

ブギが差しだして来たのは、布に包まれた細長い包みだ。重さからすると鉄製のなにかだろう。包みの形からすると、おそらく銛の先かなにかだろう。

「ナオに頼まれたもんだが、サラサが使っただろう。お前から渡してやってくれ」

「ナオに渡せばいいのか？」

「……お前はアホか」

「へ？」

「サラサに直接渡すんだよ。少しでも接触できる機会を逃してどうする」

半眼で言い含めるブギに、ザンの視線が泳いだ。

「お前な……悠長にしてて、取り返しのつかないことになってらんぞ」

思いの外重い響きの言葉に、ザンは驚いて視線を戻す。

「お前はもう、大きな失敗を一つ……いや、二つか？　してるんだ。もつと必死になれよ」

怒ったようにそう言って、ザンの手に包みを押しつける。

「失敗？」

まったく不意打ちの言葉にザンは目を瞬かせたが、ブギにはそれを説明するつもりは無いようだった。いまいちおぼつかない手元で、酒瓶や食器をまとめ始める。

「さすがに飲み過ぎたな、今日はこれでお開きにしよう」

やろうと思ってた仕事を忘れてたな、と笑いながら席を立つブギの手から食器を受け取り、ザンも母屋に向かった。

母屋に入る寸前に何気なく見上げた夜空は、満天の星空だった。

ふと、厳しい修行の間に、普段は無骨な師匠が教えてくれた、古い古い歌を思い出した。

それは、もの悲しく、優しい歌だった。

\*\*\*\*\*

まだ幼いといえる少年は、丘の上に立っていた。

早朝、まだ明け切らない空は、薄く夜の色を残している。

海から吹いてくる潮の香を乗せた風が、まだ真新しい少年の顎に刻まれた傷を撫で、吹き抜けていった。

その眼下には小さな村があった。

生まれてから、ずっと過ごしてきた場所。

そこだけが世界の全てだと、無意識に思い込んでいた場所。

大切なものがある場所。

いまから、すべてを置いていく場所。

生まれて初めて、泣きながら懇願した。

地面に額を擦りつけ、願いを口にした。

深夜に訊ねてきた少年に驚きもせず自宅に招き入れた老婆は、みたこともない厳しい表情で、根気強く少年の言葉を聞いていた。

やがて話を聞き終えた老婆は、部屋の隅にあった琥珀色の珠のと

ころまで歩み寄った。

かざされた老婆の手に反応して柔らかく発光し始める。

『たった今、あんたが口にした覚悟に、嘘は無いね？』

振り向いた老婆の厳しい表情。大きくはないが、鞭に似た鋭い声。

だが、少年は怯むことなく、涙を拭ってはつきりと頷いた。

『そうかい。じゃあ、いまずぐ家に帰って支度してきな』

頼みを聞いてくれそうなのはともかく、あまりに急な話に少年は一瞬戸惑った。

『なんだいその顔は。聞こえなかったかい？ いまずぐ用意して、夜が明けないうちに村を出るんだよ。それともなにかい、両親に挨拶してからでも思ってたかい。言っておくけど、自分の子供が守人になりたいなんて言い出したのを、はいそうですかと送り出す親なんかいやしないよ。守人の仕事も、その修行ですら死と隣り合わせなんだよ？ 止められるに決まってるだろ』

覚悟をしていると言っても、まだ子供だ。言葉の中に混じった「死」という響きに、少年は身を固めて唾を飲み込んだ。

老婆は半眼で少年を見据え、ふんと鼻を鳴らした。

『覚悟だなんだと言っておいて、そんなことも考えもしなかったかい？ 半端な気持ちなら、止めちまった方がいい。その程度の気持ちで修行に入れば、遠からず死ぬことになる。いまここで止めちま

えば、少なくとも死ぬことはないよ』

淡々としているが、それゆえに冷酷さを漂わせる老婆の言葉に、少年は激しく首を横に振って立ち上がった。

その目には、不安と怯えが色濃くあつた。

だが、それらを押さえつけ、乗り越えようとする強い意志も、そこに確かな存在を見せた。老婆はそれ以上無駄な言葉を重ねなかった。

『いいかい、準備が終わったらそのまま村を出て、街道沿いに東へ向かいな。道なりに行けば宿場町につくからね。今から出発すれば、子供の足でもギリギリ明日の夜までにはつけるはずさ。着いたら、ここと同じ天幕を探しな。その詠人には、あたしから伝言を出しておく。その後はそこで聞きな』

少年は大きく頷いて老婆に礼を言つと、老婆の自宅である天幕から走り出た。

そして、少年は今丘の上に立っていた。

視線をゆっくり動かすと、村外れのさらに向こう。村人が近づかない岬の方に、半ば木々に隠れた粗末な小屋が見えた。

不意に視界がぼやける。

ぐい、と顎を持ち上げて空を見上げる。

細い顎を震わせて、耐える。

少年はしばらくそうしていたが、やがて背を向けて歩き出す。

そして、振り向くことは無かった。

守人の剣が深々と打ち込まれた魔物の死体が、浜辺に打ち上げられた翌日のことだった。

\*\*\*\*\*

## 二章

### 二章 人魚の岬

1

\*\*\*\*\*

『魔物の子め!』

『引きずり出せ!』

『火をかけるっ!』

『あたしの旦那を返しておくれ!』

『オレの娘もだ!』

言葉に乗せられた、あまりに剥き出しの悪意。

自らの正義を信じて疑わない。目が開きながらにも見ていない者たちが発する暴力的な雰囲気。濃厚なそれは狂気と言い切ってしまっても良かった。

行動に酔いしれ、罪悪感を置き去りにし、誰一人として自分たちの姿を顧みない。

妄信という名の熱病に冒された患者の群。愚かであるが故に立ち止まることなく蹂躪し、踏みにじり、すり潰すのみに邁進する。

月明かりもなく、星明かりもない闇夜だった。

手明かりがなければ一寸先も見えない暗さの中、何本もの松明を掲げた幾つもの人影が、粗末に過ぎる小屋の周りを取り囲んでいる。

松明の炎が悪魔のように揺らめき、それに合わせて影達が奇怪な踊りを踊っている。

その不吉な影と周囲を取り囲む悪意から、背後の小屋を守り、男は立っていた。

やや大柄なその身体には力みはなく、不必要な気負いもない。

男はただ大きな岩塊がそこにあるように、泰然と立っていた。

腰には、細かい象眼が施された長剣を下げていたが、殺気立つ影達に囲まれながら、それに手を掛ける気配はない。

やがて、影達の真ん中が割れて、多少の威厳をまとわせた壮年の男が進み出てきた。

中年の男は、精一杯の威厳を保とうとしていたが、どう足掻こうと、逆にあがけばあがくほど長剣の男との格の差は一目瞭然だ。そ



の右手中指には村長の証である指輪が填められている。

『わしは、皆を止めようとしたんだ』

もの言いたげに見つめる男の視線を避けながら、村長が発したのは、言い訳じみた一言。

だが、それでも勢いがついたのかさらに続ける。

『わかるだろう？ 皆、もう限界なのだ。飢饉に、嵐。それに疫病……。そして今度は魔物だ。もうわしには皆を止めることはできません』

それを最後まで黙って聞いていた長剣の男は怪訝そうに首を傾げると、響きのよい低音でゆっくりと口を開いた。

『ここしばらく続いた災害で、皆の心が荒んでいるのは理解できません。今回の魔物の件は、守人でありながら、被害を出した上にいまだ退治できていない私に責があることも理解できません。ですが……』

言葉を切り、固唾を飲んで二人のやりとりに注目している村人達を見回す。

長剣の男には見知った顔ばかりだった。

ここところ近隣の村々を脅かしている魔物により、家族を奪われた者達がいた。

彼らの哀しみは、魔物から彼らの生活を守るのが使命である、自分の不甲斐なさが招いたものだ。彼らの憤りを受け止める義務が自

分にはある。

だが彼らも、魔物に家族を奪われたわけでない、疫病や嵐で家族を失った村人達も、憎悪に満ち視線を注ぐ相手は長剣の男ではない。

その後ろ。小屋に向かっただ。

『村長、これはどういうことでしょうか？ 魔物を狩ることもできていない、自らの仕事も満足にできていない私に対する抗議。そう受け取ればよいのでしょうか』

長剣の男の言葉に、村長が苦虫を噛み潰す。

『言わずとも解っているだろう。遠回しにとぼけるのはやめて貰いたいものだ』

『とぼけてなどいません。貴方こそ回りくどい言い方をせず、はっきりと仰ったら如何か？』

鋭く詰問する口調に、村長が眉を吊り上げる。

『だったらはっきり言おう、あの「魔物の子」を出せ！ あの子供のせいで災厄が村に降りかかるのだらうからな！』

『殺すのですか？』

村長が僅かに残った良心からか、使わずにいた言葉を男はあつさり口にする。

数に任せて責め立てるような卑劣な真似をしておいて、今更なに

を躊躇することがあるのか、村長が言葉に詰まる。

『私の娘を、殺すと、そう言われるのか？』

威圧感があるとは言えない態度だというのに、男が言いながら一歩を踏み出すと、それに押されるように村長が一步下がる。

『ど、どう考えてもおかしいだろう？！ あの子供が生まれてからというもの、悪いことが重なりすぎる！ あの子供が原因に決まっている！』

下がってしまったことに羞恥心を刺激されたか、顔を赤黒く染めながら怒鳴る村長。

その内容とえば、言い訳にしてもお粗末極まりなく、責任転嫁と八つ当たりでしかない。？なぜ娘が原因と言い切れるのですか？ 婆様もそれははっきり否定されていたはず。嵐による被害も、食糧難も、流行病も、初めて起こったものではないでしょう。それが偶然に重なったのは娘のせいだと仰るのか？？

怒りはない。男の言葉にはただ事実を確認しようとする厳然さがあつたが、集団心理に正常さを奪われ、はけ口を求める村人達が、今更引き下がるわけもない。

むしろ、正論に対して反論ができないぶん、不満は高まる。

『娘と同じ時期に生まれた子供は他もいるでしょう。……綱元、貴方の娘さんは、私の娘と一月も変わらない生まれでしたね？』

いきなり話を振られた、人垣の前面にいた髭面の男が言葉に詰ま

る。

『それなのに、私の娘が少し他人と違う見た目をしているだけで、すべての責任は娘にあると、そう言われるのですね？』

ぐるりと周囲を見回す男の視線を、正面から受け止められる人間は、少なくともここには誰一人いなかった。

もしここで男の視線を受け止められたなら、そこに浮かんでいたのは怒りでも侮蔑でもなく、哀しみに満ちた憐れみの色であったことに気が付いただろう。

『だが、現に多くの死人が出たのだ！ 流行病もなんとか鳴りを潜め、食糧難も目処が立ったが、まだ魔物はうるつき、死人が出続けているのだ！』

理屈も何もなく、やりどころのない不満と憤りをぶつける。

そこには彼らの信じる正義など、影も形も存在しない。

結局彼らにとっては大義名分など必要なく、ただ自分たちの不満をぶつける先が欲しいだけなのだ。

すべてを見透かしているような男は、ひっそり溜息をついた。

それは周りの誰にも気付かれないようなものだったが、真正面にいた村長だけはそれに気付いてしまった。

『貴様！』

その溜息を侮蔑ととったのだろう、血が上つてドス黒く染まった顔で男に掴みかかり、呪いを掛けるように言った。

『貴様などに、妹をやるのでは無かった……！』

どんな言葉にも揺るがなかった男の表情が、そこで初めて揺らいだ。

『やめてよ！』

甲高い子供の叫びが、弾けそうにまで高まっていた場の緊張感に冷水を浴びせかけた。

その声に驚いた二人が目を向けると、人垣をくぐり抜けて小さな人影が転がり出てきた。

小さな人影は捕まえようとする手をくぐり抜けて、まっすぐ村長の腰の辺りに突っ込む。

必死な様子で村長の腰にしがみついたのは、十歳になるかならないかの少年だった。

全力でぶつかっても、大人を揺るがせもできない少年は、無我夢中で叫んだ。

『やめてよ、おとうさん！ あのこがなにをしたっていうんだ！ おじさんやおばさんがなにをしたっていうんだよ！』

少年 息子の登場は予想外だったのだろう、面食らっていた村長だったが、すぐに怒りの表情に変わると、遠慮会釈無く怒鳴りつ

けた。

『なんでお前がここにいるのだ！ 家にいると言ったはずだ！ 離さんか！ 子供が首を突っ込む話ではない！』

怒鳴りつけられようが振り回されようが、村長の服をがっしり掴んで離そうとしない少年に業を煮やし、醜態を衆人環視にさらしている羞恥心に顔を染めた村長は、衝動的に力任せの拳を振るった。

鈍い音が響いて少年が地面に転がり、そのままぐったりと動かなくなった。

場が凍り付いたように静まりかえる。

村長は頭を冷やされたのか、自分の手と息子を交互に見て、どうしたらいいのかわからずに立ちすくんだ。

凍り付いた時間の中、男だけが素早く少年に駆け寄って抱き起こした。

『あ………』

一瞬だけ気を失っていた少年は、男に抱き起こされると薄く目を開けた。

その口の端からは血が筋を引き、指輪に引っかけられたのだろう、顎の左側が大きめに裂けて、血が溢れていた。

男は懷から清潔な布を取り出して少年の顔を拭いてやると、その布を握らせる。

『これで傷口を押さえておきなさい』

まだどこか支店の焦点が合わない感じで布を受け取り、言われるままに顎の傷を押さえる。

やがて、意識がはつきりしてくるにつれ、その瞳に涙が滲んでくる。

『おじさん……。ぼく……。ぼくは……』

殴られたからではなく、傷の痛みからでもない。

ただ、己の無力さに対する悔しさから溢れた涙だった。

男は、優しく柔らかい笑顔で、そっと少年の頭に手を置いた。

『お前は、優しくて勇敢だな。……お前はいい男だ』

大きな手のひらから伝わる温もりに緊張が解けたのか、少年は静かにしゃくり上げ始めた。

男は手を貸して少年を立たせると、ゆっくり辺りを見回し、村長の方を向いた。

すでにその顔には少年に見せた表情はなく、代わりにあったのは痛みすら感じられそうな決意の色。

『村長』

『な、なんだ？』

茫然自失の体だった村長が、急に声をかけられてビクリと肩を震わせた。

明らかに先程までとは雰囲気が変わった男に、目に見えて気圧されている。

『魔物を退治すれば、納得していただけますか？』

目の前の村長だけでなく、周りを取り囲んだ者達全員に対する問いだった。

村長は少し落ち着かないで周辺を見回す。一連のやりとりで、すでに氣勢を削がれていたらしく、積極的な反対意見はなさそうだった。

『……うむ。今、わたらの生活を脅かしているのは、とりあえず魔物だけだ。それさえなんとかねばな。だが、退治すると言っても、できるのか？ 現に、今の今まで……』

『それが守人の使命ならば』

強い口調で、村長の言葉を遮る。

『なんとしても』

幼い少女は、小屋の中で母にしっかりと抱かれたまま、泣き続け



ていた。

押し寄せる圧倒的な悪意に、抗う術を持たない少女が、他に何ができるだろう。

小屋を取り巻く大勢の気配が、陰鬱な足音と共に去った後も幼女は泣き続けた。

そうしていれば、にじり寄ってくる不安が消え去るかのように。

その後待つ、父の運命を知っているかのように。

\*\*\*\*\*

ふと、サラサは目を覚ました。

真夜中。

明かり取りの小さな窓から月の光が差し込む小屋の中は暗く、壁の所々にある隙間からも刃物のような月光が差し込み、真ん中の簡易な炉の灰の中にほんのりと赤い熾火が見えた。

目が腫れぼったい。

手を伸ばすと濡れていた。

ゆっくり身体を起こすと粗末な掛け布が滑り落ち、その上に瞳を濡らしていたものの残りがこぼれ落ちる。

ほんの少しの間だけそのままだった後、握りしめた拳で目元を乱暴にこすり、弱々しく溜息をつく。

もうあの日から随分経つが、今でもよく夢に見る。

それでも昔に比べれば随分ましになったのだ。

母が生きていた頃には、夜中に跳ね起きて、母が懸命になだめてくれるのにも構わず、延々と泣き続けたことも多かった。

悲しさや辛さ、恐怖が薄れたわけでも癒されたわけでもない。まして、無感覚になったのでもない。

ただ我慢できるようになっただけ。

誰もいない部屋を見回す。

もう一度、ひっそりと溜息をつく。

ささやかだったが、暖かい時間。

ささやかだったからこそ、なによりも大切だった空間。

心の底に沈殿した思い出は、溜息で吹き上げられ、またゆっくりと沈んでいく。

思い出すには辛く、忘れてしまふには哀しい記憶。

胸の奥からこみ上げる感情は無理矢理飲み込んで、荒々しく掛け布を頭から被って横になる。

それからしばらく、遠い潮騒を聞きながら寝返りも打たずにそうしていたサラサは、やがてのろのろと起き上がる。

眠気はもうどこかにいつてしまったようだ。

もたもたと簡単に身支度を調え、銚子を手に小屋を出る。

夜空の中天には満月が掛かり、その明るさで星がよく見えなかった。

村からかなり離れ、浜からもやや離れた小高い丘に、サラサが暮らす小屋はあった。

昼間であれば、林の隙間から村が少し見えるのだが、こんな真夜中に起きている者はいないようで、村のある方角は夜闇に紛れてよく見えない。

白々とした月は透明な光を地上に投げかけ、控えめな星は夜空の主役を引き立てる立場に甘んじていた。

サラサは顔を晒したまま、ボロボロ布を胸の前でかき合わせ、村とは反対方向に歩き出した。

しばらく歩き続けると、まばらにごつごつした岩が増え始め、やがて景色は砂浜から岩場に変わっていく。岩と岩へ飛び移りながらさらに進む。

サラサが向かう先は岬になっているが、その岬は近隣では最も風光明媚な場所として知られ、入り組んだ岩場は豊富な海産物を育んでいる。

それにも関わらず、昔から近づく人間はほとんどいない。

「人魚の岬」と人々が呼ぶその岬は、古くから人魚が出没し人を惑わすとされていたからだ。

言い伝えの真偽はともかく、昼間でも人が近づかない場所である為、サラサは好んで足繁く通っていた。

今日のように寝付かれない夜などは、ほぼ必ずやってきている。

海に向かって伸びた岬の突端まで来たサラサは、鯨の背のように海面から姿を見せている岩場に飛び移り、銚を下に置いた。

それから周辺を見回して何もいないことを確認すると、サンダルを脱ぎ、着ているものをすべて脱ぎ始めた。

するりと服を脱ぎ落としたその下から現れたのは、人の形をした月光のような姿だった。

長く緩やかに波打った豊かな髪も。

精緻な彫刻のように整った容貌も。

細く華奢に見えるが、しっかりと引き締まった手足も。

なめらかに曲線を描く、上質な陶器の肌地をした身体も。

すべてが月光を浴びて、蒼みがかったほのかな白銀に輝いていただった。

その身体の中で、月明かりを呼吸する薄赤い可憐な唇と、血の深紅を湛えた瞳だけが、花の咲くようにしてあった。

魔物に呪われた、と人々が噂するサラサの姿。

赤以外のすべての色を無くしたようなその姿を、サラサは生まれながらに授けられた。

世界の淀みから生まれてくると言われる魔物。それを退治する役目を背負った守人を父に持ったサラサのその姿は、魔物の呪いと噂された。

普通の姿をしていれば飛び抜けて美しい容貌も、その魔性を引き立てるものでしかなく、村人達には恐怖の対象でしかない。

だが、今この時。

月光の下に惜しげもなく晒されたその姿は、至高の芸術品のごとく美しかった。

それでも、サラサ自身は自分の身体を見下ろしてひどく悲しい顔を見ると、震えるように自らの肩を抱いた。

それがどんな美しさをもっていたとしても、サラサは自分の姿が堪らなく嫌いだった。

自分のこの姿にも関わらず、優しさと愛情を注いでくれた両親を不幸にしたのは、他ならないこの姿だった。

他人が見たら、おそらく奇異に思うだろうこの月光浴は、太陽の光を長く浴びることができない、世界から拒絶されたような存在である。と自覚するサラサが、自分は確かにこの世界に存在するのだという確認の儀式だった。

例えそれが気休めでも、意味のないことだったとしても、サラサにとっては、大事な、大事な時間だった。

その時間を邪魔する者は今、誰もいない。

清らかな輝きを投げかける月と、さざめく星々がそれを見つめ、潮騒だけが熱心にその美しさを誉め讃えていた。

どれだけの時間が経った時だろうか。

「……あなたは、誰ですか？」

その小さく可憐な声は、潮騒に紛れることなくサラサの耳に届いた。

突然の声に、サラサは弾かれたように、素早く脱いだ服と鉢を手には伸ばし、身体を隠しつつ油断無く鉢を構え、声の主を捜した。

「えっ……？ あ、あのっ、驚かしてしまったのなら、ごめんなさい……」

サラサの反応は予想外だったのか戸惑いが色濃い声は、妙に礼儀正しい少女のものだった。

声がしてきた方にサラサが目を向けると、岩の縁に手を掛け、海中から顔だけ出しておどおどとこちらを覗き込む少女と目があつた。

見たところ、サラサより二歳か三歳ほど年下だろうか。この辺りでは珍しい金髪で、そのやや垂れ気味の目はマリンローズの紫がかった青だった。

警戒心剥き出しの視線を向けるサラサの態度に少々の怯えを見せながらも、少女はさらに訊ねてきた。

「あの、いけないとは思いましたが、先程からずっと見てました。話しかけるつもりはなかったのですけれど、あの、……あまりに綺麗なお姿でしたので、つい……」

一向に警戒心を崩さず鋭い目で見つめてくるサラサに、その語尾がしぼんでいく。

「あのう……怒ってます?」

精一杯身を縮めて上目遣いに訊ねる少女から目を離さず、いつも被っているボロ布だけを身体に巻き付けて、サラサは厳しい声で逆に訊いた。

「あなた、この辺の子じゃないね?」

「え? あの、まあ、この辺と言われれば、この辺に住んでるんですけど……」

妙に齒切れの悪い返答に、サラサの警戒がさらに濃くなる。

大体、真夜中だというのに、人が普段近づかないような場所で、こんなに気弱そうな少女がうろついていること自体おかしくはないか。

見たところ、人目を避けなければいけないような要素は見あたらない。確かに地元の人間にしては肌が白いものの、サラサとは違ってごく自然な白さだ。サラサほど日光に気をつけなければいけない理由があるとも思えなかった。

「とにかく、あがってきなさい。いつまでもそうしているわけにもいかないでしょう?」

比較的今日は波が穏やかだが、それでも岩場には小さな波が打ち寄せている。半分海に浸かったままでは、あまり落ち着いて話してもできないだろう。

だが、少女は急にそわそわし始め、きよろきよと視線を彷徨わせ出した。

「えっと、その、上がらないとダメ、ですか?」

「……人間の振りして、海に引きずり込もうとする魔物もいるそうだけど?」

半眼のサラサが銚の柄を絞り上げると、少女は慌てて両手を振った。



「あ、あの、わたし、魔物じゃないです！」

「自分で、魔物です、って言う魔物もいないような気がするけど」

「あう……それはそうですね」

少女はなおも躊躇して押し黙ったが、やがて覚悟を決めた様子で口を開いた。

「あの、何を見ても驚かないって、約束してもらえますか？」

「わたしも見ての通りだから、大抵のことには驚かないと思うけど」

「それじゃあ……」

少女は岩の上に両手をかけ、海に浸かっていた下半身を一気に引き抜くようにして、岩の上にお尻を乗せた。

その腰から下が、月の光を反射して虹色に輝いた。

「え……？」

ほっそりとした腰のすぐ下から、見える範囲全体が小さく薄い鱗に覆われていた。その美しい色が、少女の身動きとともに微妙な変化を見せる。

少女は二本の足を持つてなかった。

足の代わりに伸びていたのは、魚とイルカを掛け合わせたような造形の下半身。

サラサからは海中残っていて見えないが、その下半身の先にはおそらく大きなヒレがあるのだろう。

「人魚?!」

自分の見たものを信じられずに、サラサは丸く見開いた目を何度も瞬いた。

見た瞬間に人魚だと解つたのは、サラサ自身に目撃経験があつたからではなく、おとぎ話で聞いていたからだ。

絵すらみたこともなかったが、上半身が人間で下半身が魚など人魚以外にあり得ない。

村人は実在を信じてる者が多いようだが、人魚の岬近くによく潜るサラサにとって、人魚など迷信の産物で、実際にいるなどと考えもしなかった。

しかし、目の前にいるのは、紛れもなく人魚だった。

サラサは少しパニックになりかけて、顔を押さえて深呼吸を繰り返す。

「やっぱり驚きましたか？」

その反応に否定的なものを感じなかったのか、人魚の少女は悪戯っぽく、クスリと笑った。

「初めまして。虹色鱗の部族、鼻先の一番手リユークの娘、フラム

と言います」

姿を見せて開き直ったのか、フラムに先程までのオドオドとしたところが無くなっていた。

身体の構造上、岩の端に腰掛けたままでは正面が向けないので、できるだけ上体をサラサに向けて、丁寧な彼女の部族における正式な名乗りをする。

「よろしければ、あなたのお名前を聞かせていただけますか？」

好奇心に満ちた無邪気な笑顔で小首を傾げる。

言葉遣いは大人のようなのだが、その見た目や仕草、くるくるとめまぐるしく変化する表情は、逆に幼さを感じさせた。

その態度を見た途端、サラサの中にあつた警戒心は煙のように消え、代わりにこの人魚の少女に対する好奇心が湧いてきた。

「わたしはサラサよ」

答えながら銚を左手に持ち替え、フラムの側まで歩いて行くと、その隣に腰を下ろした。

いくら人魚とは言え、明らかに不自然な体勢でいるフラムを考慮して、少しでも相手に楽な姿勢で話を聞こうと思ったのだ。

座る時にフラムの足下を見下ろすと、燐光を発するようにきらめくフラムの尾びれの先が、意外な長さで水中を揺らめいていた。

ふと横顔に視線を感じてフラムの方を向くと、彼女はすぐ隣にやってきたサラサの顔を、穴が空きそうなほど凝視していた。

その視線に悪意の類は感じられず、あまりにまっすぐ純真なものだったので、あまりそういう視線に慣れていないサラサは戸惑った。

「あの、名乗ったばかりで、不躰な質問をしていいですか？」

前のめりに訊ねてくるフラムの表情は真剣そのもの。

サラサは多少気圧されながらも頷く。

「あのですね……」

ごくろ、とフラムの喉が動く。

「サラサさんは人間ですか？ それとも、ひょっとして、月の精霊だったりとか！？」

「……………は？」

突拍子もない言葉に、サラサはポカンと口を開けて絶句した。

一瞬、自分には理解できない冗談の類なのかと思ったが、フラムの真剣な様子を見る限り迂遠な冗談の類ではないらしい。

どうも本気で訊いているらしいことが理解できたサラサは、苦笑いを浮かべながら答えた。

「……違うよ。わたしは人間。月の精なんかじゃない。そう……」

どこか複雑に、色々な感情が見え隠れする目をフラムに向ける。

透明な微笑み。

「わたしは、ただの、人間だよ……」

2

「よう」

目の前に広がる砂浜と海を望む木陰に座り込み、ボロ布を被ったまま、うつらうつらと舟を漕いでいたサラサは、ふいに掛けられた声で目を覚ました。

わざわざ確認しなくても、誰なのかはすぐに判った。

「……なんの用？」

寝起きという理由だけではなく、聞いた者がどれだけ鈍かろうと即座に気付くだろう不機嫌な声で、相手の顔も見ずに言い捨てる。

「確か、わたしは関わるなって言ったような気がするけど」

どこをどうとっても友好的とはいえない態度に怯みながらも、ザ

ンはサラサの目の前に細長い包みを差し出す。

「あー……これ、頼まれたんで、届けに来たんだ」

サラサはボロ布の奥から包みを確認し、黙って受け取るとすぐに包みをといて中を確認する。

「ナオに頼んでたやつ……なんでアンタが持ってくるの？」

「昨日ブギのところに厄介になってな。その時にブギから頼まれた」

「……ふうん。一応、礼は言っておくわ」

丁寧に銚先を包み直して膝の上に乗せたサラサは、そのまま海を眺めて動かなくなる。

だが、ザンは所在なさげにはしているが、その場に突っ立ったまままだ。

「まだなにかあるの？」

立ち去る気配のないザンに、やはり視線を向けずに言う。

しばし逡巡してからザンは口を開く。

「……座らせてもらっていいか？」

「……………好きにすれば」

少し長めに沈黙してから帰ってきた返事は素っ気のないものだった。

たが、とりあえずは拒絶では無かったことに安堵したザンは、サラサと微妙な距離を置いて、海の方を向いて座る。

その一連の動作の間、サラサの視線が腰の長剣に注がれていることにザンは気付いたが、サラサの方を見るとすぐに視線を逸らされたので、慎重にそこは触れないようにした。

しばらく並んで海を眺めていたが、やがてザンが思い出したように言った。

「叔母さん……亡くなったんだってな」

サラサは無言。

「叔父さん達の、墓は建てたのか？」

「……そんなこと聞いてどうすんの？」

やはり固い声にザンは迷ったものの、素直に答えた。

「叔父さんと叔母さんには世話になったから、墓参りさせてもらいたいなと思って……」

「無いわ」

ザンが喋っているのをスッパリ断ち切るように、サラサははっきりと答えた。

「アンタは、お父さんが行方不明になってすぐどこか消えちゃったから知らないだろうけど。結局あの後見つかったのはお父さんの剣

だけで、お父さん自身はもちろん、形見になりそうなものも何一つ見つからなかった。強いて言えば」

ボロ布の下で、サラサの視線がザンの長剣に向くのが判った。

「それが形見つてことになるのかもしれないけど、守人の証だからとかいう理由で取り上げられたから。本当に死んだかどうかも判らないお父さんのお墓を、わたしもお母さんも建てる気にならなかった」

淡々と言いながら、視線を海に戻す。

「どう考えたって生きてるはずなかったけど。……だから、お母さんが死んだ時は、少しでもお父さんの側に行けるように、わたしが自分の手で海に流した」

ただ事実を口にしていただけの口調。ザンは黙って聞いていた。

「お墓っていうんなら、この海が、お父さんとお母さんのお墓って言えるのかもね」

ザンには、サラサにかける言葉を思いつけなかった。

重い沈黙。二人の間を潮騒だけが流れる。

しばらくして、先に沈黙を破ったのは、以外にもサラサからだっ

た。  
「そつえば、アンタ結婚するんだって？」



いきなり予想外の方向から浴びせられた話題に、ザンは言葉を失った。

サラサは不自然なくらい落ち着いた声色でさらに言う。

「ナオから聞いた。喜んでたよ、あの娘」

「い、いや、それはその……」

しどろもどろに、なにか言い訳めいたことを口にしようとしたザンが無視して、サラサは村の方に顔を向けた。

「噂をすれば影っていうけど」

その言葉にサラサが見ている方向に顔を向けると、ナオが小走りにこっちへ向かってくるのが見えた。

「じゃあね」

そちらにザンが気をとられた瞬間に、戦いの訓練を受けたザンが驚く程の絶妙な間で立ち上がったサラサは、そのままあっという間に早足で立ち去った。

ザンは狐に摘まれたような顔でそれを見送ってしまったあと、我に帰って自分の顔に張り手を一発入れ、溜息と共に大きく肩を落とした。

\*\*\*\*\*

『かくれちゃダメだろ、ほら!』

少年は自分の背後に回って前に出ようとしないうる小さな女の子の腕を掴み、半ば強引に引きずり出して前に立たせる。

しかし、女の子はまたすぐに小動物の素早さで少年の後ろに戻ってしまう。

『おい、怒るぞ!』

苛ついた少年の大声に、少年の脇からはみ出した小さな肩が小さく震える。

『べつにいいよ? こわがってるじゃない』

少年の目の前に立つ、ボロを被った小さな人物が、遠慮がちに言う。

声からすると女の子のようで、少年の後ろに隠れる女の子と体格からするとほとんど年齢に差はないだろう。

『怖がつてるわけじゃないって。だって、こいつが来たいって言うんだもん。はずかしがつてるだけだよ』

『……そうなの?』

『そつだよ!』

少年の力強い保証に勇気づけられたボロ布の女の子は、頭まですっぽりと被った布を肩まで下ろした。

布の下から現れたのは、真珠よりも美しい純白の髪。整った容貌の中に据えられた深紅の瞳。

少年の後ろからそれを伺っていた女の子が慌てて顔を引っ込める。

ボロ布の女の子がゆっくり少年の背後に回ると、相手は少年の背中に顔を押しつけてしがみついていた。

その肩を優しく叩く。

相手の女の子は、びっくりして飛び上がり、慌てて振り返る。

そこで初めて二人の女の子はお互いを見つめ合った。

磨き込んだ黒曜石のような黒瞳とお揃いな、艶のある黒髪は短く整えられていて、美しいとは言えないが、日焼けした肌と共に生命力が満ちて愛嬌があり、充分に可愛らしい。

見た目に関していえば、あつらえたように好対照の二人。

黒髪の女の子の方は、不思議な美しさを持つ真珠のような女の子に魅入ったように無言。

『はじめまして。よろしく、ね?』

『あ……うん、よろしく……』

首を傾げて笑顔を浮かべると、黒髪の女の子は顔を赤く染めてうつむく。

相手に判るように、右手を差し出しつつ言う。

『わたしのおともだちに、なってくれる？』

黒髪の女の子は驚きに目を瞬き、差し出されたその手を見て、先刻から黙って二人のやりとりを黙ってみている少年を見て、最後に真珠色の女の子を見た。

少し長めの時間その視線は、差し出された手とその持ち主の顔との間を彷徨っていたが、やがて黒髪の女の子はその手を握った。

『……ともだち？』

『うん、ともだち』

ようやく黒髪の女の子が、本来の魅力的な笑顔を浮かべる。

二人が仲良くなるのに、さほどの時間はかからなかった。

\*\*\*\*\*

鎚打つ響きが作業場に満ちる。

こぢんまりと、だが機能的に考えられて整えられた横座に腰を下ろして、ブギは鍋の修理をしていた。

溶けた銀色の鉄を、鍋の底に空いた小さな穴に擦りつけ、金床の丸い部分を使って叩き馴染ませて塞いでいく。

鍛冶屋というと道具を作るイメージが強いが、ブギのように野鍛冶に分類される小さな鍛冶屋は、作るよりも修理作業の割合が圧倒的だ。

新しく作ることも無くはないが、新しい鉄材で作ることは少なく、多くは古鉄を作り替えることが多かった。

道具の修理にせよ、作り替えにせよ、人が使ったという時間が染みついた道具が、火の中で新しく生まれ変わったり、元的能力を取り戻していく行程がブギは好きだった。

今日は特に調子が良いのか、昨日の深酒の影響もほとんどないようで、鼻歌交じりに作業を進めていく。

「ほい、一丁上がり」

粗熱を取る為に砂の上に鍋を置くと、作業場の外から声がかかった。

「ブギ、いる〜?」

「ナオか、いらっしやい」

横座の中で腰を伸ばしたがブギが答えると、勝手知ったるなんとやらで、ナオが作業場の中に入ってくる。

「頼んでた物を取りに来ただけど」

「は? ああ、銚のことか。ナオ、今日はザンに会ってないのか?」

「さっき会ったけど」

「じゃあ言い忘れたかな? あいつ昨日はうちに泊まったんで、その時ついでだから届けてくれって頼んだんだが」

「ザンに?」

「聞いてないか?」

ナオは首を横に振った。

「会ったことは会ったけど、なんか考え事してたみたいで生返事だったし……。あ、そっか」 不意に納得して手を叩く。

「だからさっき浜の方にいたんだ」

「浜?」

「うん、サラサがいつも海見てる辺り。あ、そうそう、借りてた本

も返しに来たの。はい」

肩から提げた袋の中から革の装丁で、かなり専門的なごつい本を取り出し、礼を言いながら差し出した。

「もう読み終わったのか。どんどん早くなるな」

「勉強するの、面白いもの。いつも仕事中に邪魔しちゃってゴメンね」

「いや、こんな田舎じゃ好きこのんで読書しようなんて変人はおれしかないからな。他にも読んでくれる人間がいるなら、本も喜ぶさ。ちよつと待ってろ、次の本持ってきてやるから」

本を受け取って横座から出たブギは母屋に姿を消して、しばらくすると、やはり分厚い本を持って戻ってくる。

「さすが、詠人になろうって人間は勉強家だな。そういや、央都に留学するって話があったよな。どうなったんだ？」

「その話？ うん、しばらくは延期になるのかな」

ナオは小麦色の頬を少し赤く染める。

「ほら、これから、少し忙しくなるじゃない？」

ナオの態度に、ブギはほんの少し眉根を寄せた。

「なあナオ、ザンの奴、何も言っていなかったか？」

妙に漠然とした質問だったが、ナオは首を横に振る。

「何って、別に……？ さっきも言ったけど、なんかぼけつとして、ほとんどこっちの話なんて聞いてなかったみたいだよ。なんだ？」

「んー、いや、心当たりがなければいいんだけどな」

「変なの。じゃあ、用事も終わったし、帰るね。本、ありがと」

「ああ」

手を振って作業場を後にするナオに手を振り返し、その背中が見えなくなるのを確認してから、ブギは唸りつつ頭を掻いた。

「後に回せば回すほど面倒臭くなるだろうに、なにやってるんだあいつ」

「そう簡単じゃないんですよ。幼なじみなんだから、ザン君にも色々あるんじゃない？」

「うおっ！」

独り言のつもりで呟いたことに返事が帰ってきて、ブギは驚きに声を上げる。焦って振り向くとヨナが二人分の茶を用意して立っていた。

「ナオちゃん帰っちゃったのね。お茶の用意してきたんだけど」

夫の様子に、くすりと笑顔を浮かべ、近くにある手頃な台にお盆



ごと茶を置いて自分も座る。

「二人のこと……いえ、三人ね、心配なのはわかるけど。男女の仲は、外から見てるとバカバカしいくらいに単純に見えることもあるわ。本人達には見えないことだらけでしょうけど」

バツが悪そうに正面に座る夫を優しい目で眺めながら、ヨナは茶に口をつける。

「オレはさ……あいつの友達なんだよな。でも、ザンがサラサと知り合ってから、昔の一件の時も、あいつになにもやってやれてないんだよなあ」

ぼつぼつとこぼすブギの言葉を、妻は黙って聞く。

耳学問ではあるが、ブギはかなり早い時期に、サラサのような容貌の持ち主が稀に世の中に存在していて、央都最新の学説で魔物との関連性についてはっきりと否定されていることを知っている。

元々他の村人達と違って、あまりサラサに対して先入観をもっていなかったが、物心つく前からの付き合いであるザンとサラサの交流が始まった頃から、すでにサラサに対する悪意など欠片もなかった。

当時はザンと遊ぶ時間が少なくなったことに寂しさは感じたが、それ以上に嬉しそうな友人の顔を見るのは嬉しかった。

サラサが今ほど態度が硬化する前に、本来の性格を見知っていた為、村人のサラサに対する扱いには忸怩たる思いもあるが、自分一人が騒いでも何も変わらないだろうし、下手に問題にすると、逆に

風当たりが強くなってサラサからの仕事を受けるのに支障が出る可能性もある。

元々他村の出身のヨナには、ブギの影響で先入観を持たせないで済んだのだが。

「多分、余計なことをしないのが一番良かったんだとは思っけどな。それでも、もっとなんかやってやれたんじゃないかって、今でも思うんだよ……」

「なにもないと思うわよ」

スッパリとブギの愚痴を切り捨てるヨナ。

「色々と状況は面倒臭かったのかもしれないけど、あなたが心配してるのは、ザン君とサラサちゃんのことでしょ？　そこだけに限るなら、結局は男と女の話じゃない。少なくともこれからのことは、本人達がなんとかする話よ。周りは見守るしかないわ」

「……大したもんだよ、お前は」

盛大に苦笑いするブギ。

「まあそういうところに惚れたんだけどな」

「褒めても今日はお酒、出ないわよ。昨日あれだけ飲んだんだから、そう言いながら、まんざらでも無さそうにクスクスと笑うが、すぐに表情を曇らせる。

「でも……本当になににもできないわよ。ザン君が帰ってきたから、多分一番最悪なことは避けられるでしょうけど。二人の間のことはわかりはね……。唯一できることって言うなら、ザン君が弱音を吐きたがってる時には、一緒にお酒でも飲んであげることくらいかしら？ そうついう時くらいなら、好きに飲んで構わないから」

ザンとは昨日初めて会ったし、サラサとはほとんど交流がなく、ナオとも顔見知り以上の仲ではない。だが、自分の夫が彼らのことを大切に考えているのはよく解っていた。

正直に言えば、あまり面倒なことに首を突っ込んで欲しくないが、ブギの気持ちを考えれば、自分にできるくらいのことなら協力したいと思っているヨナだった。

「ありがとうな、ヨナ。さ、仕事するか」

ぐいっと残りの茶を干して、ブギは立ち上がった。

4

満月からいくらか欠けた月が、それでも充分明るく地上を照らしていた。

「ごめんね、待たせた？」

普段の言動を知っている人間が聞いたら耳を疑うような優しい声

で、サラサは岩棚に腰掛けたフラムに声をかけつつ、自分もその横に座って波打ち際に足を入れた。

「いいえ。わたし、星を見るのが好きなので、待つのは苦になりません」

太陽の下で見れば、さぞかし輝いて見えるであろう笑顔でフラムは答える。

満月の夜の不思議な出会い以来、二人はこうして真夜中の待ち合わせを重ねていた。

最初の出会いの時に、サラサは人魚が種族として実際に存在し、しかも地上と海中の違いはあるが、人間と大差のない生活をしているということを知った。

フラムから聞いたところによると、人魚という種族は出生率がやや低いらしく、同年代がほとんどいないそうで、その為一人で遊んでいることが多いそうだ。

出会った夜も、一人で星を見に出てきたところで、偶然にサラサの姿を見つけたらしい。

両親には内緒で出てきている為、バレたらきつと怒られます、とフラムは笑っていた。

その後しばし話し込み、どちらともなくまた会う約束をして別れたのだが、他に解ったことと言えば、フラムがいわゆる族長の一人娘で、今年十三歳になるということ。

それと人魚の部族が岬の沖合に広がる珊瑚礁の辺りだったということだった。

本来人付き合いを避けがちのサラサだったが、それは本来の性格というわけではなく、相手に迷惑を掛けたくないというのが根本にある。

それは特にナオに対して顕著だったが、ナオが自分を友達と呼んで、今でも親しげな態度で接してくれるのは心底嬉しいし、感謝もしている。ナオがいなければ、生活雑貨の類を手に入れることすら今より遙かに苦労するだろう。

だが、そうであればなおさら、自分と関わることでナオも白眼視されるのではないかと、サラサは恐れているのだ。

その点だけでいえば、フラムに対してはそんな心配はなく、何も臆することなく接することができる。フラムが人魚であることなど、サラサにとっては極々些細なことだった。

「それに、こちらこそこんな夜更けに度々呼び出して申し訳ないです。私達人魚は少し肌が弱くて。あまり長い間太陽の下にいと、後が大変なもので……」

育ちが良いせいか、幼さの残る見た目に反して、フラムの言葉遣いは丁寧なものだ。

「それはわたしも同じ。それこそ気にしないで。で、今日は何の話しようか？」

二人が真夜中に待ち合わせて何をやっているのかといえば、何の

ことはない世間話である。

どうやら、陸と海という生活環境の違いから来る文化の違いがお互いに面白いらしい。

あまり話題がないサラサだが、大して面白いわけでもない話でも、フラムは興味津々な態度で聞いてくれるからか、今のところ話すネタがなくて困る心配はしなくてよさそうだった。

「この前わたしの家族の話をしましたから、今日はサラサさんのご家族の話が聞きたいです」

「わたしの、家族……？」

フラムにしてみれば、何の含みもない提案だったし、話の流れでいつても聞かれて当然のことだが、それでもサラサは自らの表情が曇るのを抑えられなかった。

すぐにそれを敏感に感じ取ったフラムが、不安げにサラサの顔を覗き込む。

「あの、わたしなにか悪いことを言ってしまったのでしょうか？」

「そういうわけじゃないけど……」

眉根を寄せるフラムの頭を撫でてやりながら、やや困った笑顔を浮かべる。

「あんまり楽しい話じゃないけど、いいかな？」

フラムが神妙な顔で頷くを見て、サラサは話始めた。

自分が、守人の父と普通の村娘だった母の間に生まれたこと。

父が一人で魔物を倒しに出かけ、そのまま帰らなかったこと。

その後、母が長年の心労から病を患い、あっという間に亡くなってしまったこと。

「お母さんは、急に血を吐いて倒れたの。前の日までそんな感じ全然無くて、元気に見えたのに。それから何度も血を吐いて、血を吐く度に痩せていった。それでも、一度もお母さん苦しいって言わなかった。……そして、七日目の朝、泣きながらわたしに、ごめんねって。それが最後」

いつの間にかうつむき、黙ってサラサの話を聞いていたフラムは、話が終わっても口を開く気配がない。

やはり話さない方が良かったかな、と少しサラサは後悔する。適当にお茶を濁すこともできたが、フラムに対してはそうしなくなかったと思ったのだが、考えが浅かったのかも知れない。

しばらくそのまま波の音だけを聞いていたが、先に沈黙に耐えられなくなったのはサラサの方だった。

思いつくままに口を開く。

「時々ね、ふっと思うの。わたしは何の為に生まれてきたんだろうって。なんで今もこうして生きてるんだろうって」

口にしてから、あれ、と思う。

こんなことを話したいわけじゃないのに。

視界の隅でフラムが顔を上げるのが見えた。

なにかどこかのタガが外れた感触、複雑に凝り固まった感情がこみ上げて、言葉が止まらない。止められない。

「わたしね、お父さんとお母さんの、本当に笑った顔って覚えてない。見たことないの。覚えているのは、わたしの為に無理して笑ってる顔だけ。お父さんはわたしの為にたった一人で魔物と戦って、お母さんはわたしの為に無理して働いて……二人とも、死んじゃった。お父さんも、お母さんも、最後までわたしのこと心配してた。でも、わたしにそんな価値あるのかな？二人ともいなくなっちゃったのに、わたしが生きてる意味ってあるのかな……？」

「やめて下さいっ！」

とりとめなく吐き出される、誰に対してのものでもないサラサの疑問を、フラムは強い語調で断ち切った。

歯止めのきかない状態に陥りかけてたサラサは、それで我に帰る。

「サラサさんがそんなこと言ったら、ご両親が気の毒です。……なにより、そんな言葉で一番傷つくのは、サラサさん自身じゃないんですか？」

はっとしてフラムの方を向くと、その大きな瞳が今にもこぼれ落ちそうなほど潤んでいた。



気持ちの悪い情動はあつという間に収まり、すぐに罪悪感に取って代わる。

サラサは気まずそうに目をそらしながら小さく謝った。

「……ごめんなさい」

「……いいえ。わたしからお訊きしたのに、大きな声を出したりして、こちらこそすいません。でも、やっぱり、そういうことって口にしらない方がいいと思います」

多少ぎこちないものの、優しい笑顔でフラムは出来るだけ明るく言う。

「でも、あの、矛盾してるかもしれませんが、そんなふうに感情を見せてくれるのは、ちょっぴり嬉しいです。……だって、わたしを信用してくれてるってことですよ、ね、それって」

フラムの精一杯の心遣いに、サラサの胸は熱くなる。こみ上げる愛しさにまかせて、隣に座る少女を両手で抱きしめる。

きめの細かいむき卵のような少女の肌から、ほんのりとした温もりが伝わってくる。

その温もりが、サラサの心と身体に染み渡った。

「……………ありがとう」

つむじに向かって囁かれた本心からの感謝に、フラムは頬を染め

てくすぐったそうに身動きした。

やがて時間が過ぎ、二人はまた会う約束をしてその夜も別れた。

いつものように、千切れんばかりに手を振りながら波間に消えるフラムを見送った後も、サラサはしばらくそこに立っていた。

波の音を聞きながら、サラサは深い自己嫌悪に襲われていた。

何年も前の話だと、自分の中ではそれなりに心の整理がついていたつもりだった。

それが、いくら他人に話すのが初めてとはいえ、あっさりと自分を失いそうになった。

しかも、あんなにも素直で優しい少女に気を使わせてしまった。

この前の夢といい、今日のことといい、このところ心が弱ってる気がする。

そう思った瞬間、サラサの脳裏によぎったのは、顎に傷のある青年の顔が浮かぶ。

激しいiraだちが心を占める。

あいつのせいだ。

なんで今更戻ってきたんだろう。やっと忘れかけてたのに。

あいつのせいで、思い出してしまった。

哀しみと、怒りと、孤独と、寂しさと。

破られてしまった約束を。

キリッと齒を鳴らして、サラサは家路につく。

月がまだ残る空は、薄い青を取り戻し始めていた。

## 三章

### 三章 浜辺に降る雨

1

いつものように、浜辺の木陰で座り込んでいたサラサはこのころの夜更かしが祟ったのか、波の音を子守歌に、木の幹にもたれて居眠りをしていた。

微かに規則正しい寝息が、被った布の奥から漏れている。

手元から転がり落ちた削りかけだった銚子の柄が、サラサの膝に乗ったままだった。

「……ん……？」

もそもそと身動きして目を覚ましたサラサは、微妙な距離を置いて座っている人影に気が付いて、ビクツと身を竦めた。その拍子に、膝の上の柄が転がり落ちる。

「あ、すまん。驚かせたか」

横に伸びた枝葉が作る大きな影の端であぐらをかいていた青年は、サラサの方に顔を向けた。

「熟睡してたみたいだから、起こすのも悪いと思ってな。……最近、居眠りばかりしてるみたいだが、どうか悪いのか？」

「……またアンタか」

心配そうに尋ねてくるザンの声を聞きながら、サラサは小さな声で呟いて、質問には答えずに、取り落としていた小刀を手に、柄を削る作業に戻った。

ここのところ、ザンは二日と開けずにやってくる。

何の用事があるのか知らないが、大抵の場合ふらりとやってきては、なにをするわけでもなく、サラサから少し距離を置いて座り、黙って海を見ている。

最初こそ気になったものの、自発的に話しかけてくることも稀なので、サラサから話しかける義理があるわけでもなく、こここのころはザンの存在を極力無視することにしていた。

しばらく黙って作業を続けていたが、視線を感じてザンの方を見ると、さきほどの問いを発したままの姿勢で、まだこちらを見ているので仕方なく口を開く。

「……アンタには関係ないでしょうが」

相変わらず素っ気も何もない返事で、会話の続きようもなく。

あまり居心地の良くない沈黙が降りる。

「あの、な」

ややあつて、ザンが控えめに言った。

「今日、ナオの家に行つて、結婚の話、断つてきた」

「……………そう」

また長い沈黙。

波の音。

「だから？」

「いや、それだけなんだけどな……………」

「ナオ、残念がるだろうね」

ぼそりとサラサが言うと、ザンは小さく呻いて沈黙した。

三度、長い沈黙と波の音が二人の間に流れる。

「アンタさ」

不意に、今度はサラサの方から口を開く。

奇妙な間の後、作業の手を止めず、ザンの方も向かずに口を開く。

「なんのためにここにくるの？ 守人つてそんなに暇なわけ？ それとも……………」

原因不明のいらつきと共に、偽悪的な感情と少しの自嘲、それに揶揄を込めて吐き出す。

「『魔物の子』を見張るのも、守人の仕事の内なの？」

「サラサ！」

それを聞いたザンの反応は予想外に劇的だった。

両肩を激しい感情に強ばらせ、腰から長剣を鞘ごと抜き取ると、その柄をサラサの目の前に突き出した。

「……なによ」

ザンの態度に欠片も怯むことなく、逆に静かな怒りを込めて、ボロボロの奥から深紅の瞳でザンを睨み返す。

ザンはその目をまっすぐに受け止めて、感情を抑えた低い声で言う。

「この剣に触れてみる」

「は？ なにを……」

「いいから」

ザンの意図は読めなかったが、静かな声に抗いたい物を感じて、サラサは布の下から手を伸ばして長剣の柄に触れた。

よく見ればほのかに燐光を放っているように見えるそれに触れる

と、日向のような温もりと、心地良いなにかがそこから流れ込んでくる不思議な感覚があった。

柄をしっかりと握ると、その感覚が強くなる。

「手が、どうにかなったか？」

しばらくその妙な感覚を味わっていると、ザンが訊いた。

柄を放して、自分の手のひらを見る。

特に何の変化も無いように見えた。強いて言えば、少し血色が良くなったようにも見える。

黙ってザンに手のひらを見せると、ザンは満足そうに頷いた。

「この微かな光は『破魔の光』って言ってな、元を正せば人間なら誰でも持つてる生命の光だ。魔物は人を襲う。なぜかといえば、生き物の生命の力が奴らの糧になるからだ。そして、奴らにとっては生命の力は火と同じだ。適度であるなら身体を暖めるが、強ければその身を焼く」

長剣を引いて腰に戻しつつ、サラサの手のひらに視線を落としながらかつ続ける。

「だが、人間にとっては、命は命。いくら強かろうが、害はほとんどない。逆に、破魔の光は病気や怪我の治療にだって応用できる。今の光に触れて平気なお前は……お前自身がどう思ってたようが、確かに人間だよ。冗談でも、そんなこと言わないでくれ」



さきほどの激情が嘘のように、どこか悲しそうなザンと目があった。しまい、反射的にサラサは目を逸らす。

細く溜息をつき、ザンが付け加える。

「……なにより、お前がそんなことを言えば、叔父さん達が悲しむだろ」

その一言に、劇的な反応が起こった。

「あんたに、なにがわかるってのよ!」

突然立ち上がり、凄まじい剣幕で怒鳴ったサラサは、ボロ布の奥から怒りに燃える深紅の視線をザンに叩きつけた。

「突然いなくなって! またひょっこり現れたと思ったら、なに? いまさらどの面下げて説教なんてしてんのよ?」

ザンが今までサラサから聞いたことのない大声と、見たこともない激怒だった。

怒りに満ちて自らを射貫く炎の色をした瞳に、ザンはつかの間傷ついたような表情を見せたが、すぐに目を逸らし、そのままサラサに背を向けて無言でその場を去った。

どこか悄然としたその背中が見えなくなるまで見送ったサラサは、立ち上がる時、無意識に掴んでいた砂を怒りにまかせて砂浜へ投げつけた。

「お前なあ。飲むのは構わんが、なにも言わんで、ただひたすら溜息だけついてんのは、勘弁してもらえんか。辛気くさくてかなわん」

すっかり陽も落ちて、辺りはすでに暗くなっている。

例によってブギの作業場の片隅で、相変わらず適当にしつらえた場所で、二人はひたすら飲んでいた。

正確に言えば、痛飲しているのはしているのは一人だけだが。

「そついや、ナオにはちゃんと話したのか？」

「……ナオの両親には、今日正式に断りを入れてきた」

台の上に突っ伏したままのザンが、酔いの回った口調で答える。

「本人には？」

沈黙。

「あほう」

容赦ない評価に、ザンは踏み潰されたような呻きを漏らし、台の上で平たくなる。

「ま、困るのはオレじゃないがね。それと、実家にもちゃんと顔出せよ。今日の昼過ぎにえらい剣幕で親父さんが怒鳴り込んできたんだからな。なにしに來たかは聞かなかったが、多分縁談関係の話だろうとは思っけど」

「いいんだよ、放っておけば」

「オレが困るっつーの。お前をうちで寝泊まりさせんのは全然構わんが、あの調子で親父さんにちょこちょこ来られると仕事の邪魔なんだよ」

「……わかったよ、明日にでも顔出してくるさ」

面倒臭そうに、杯の縁を指でなぞっているザンに、ブギは溜息混じりで腕を組んだ。

「お前、その調子だと、サラサともなんかあったろ？」

ぐ、とザンが呻く。

今日は早々にザンが酔い始めたせいで、ブギはなんとなく自分が飲むタイミングを逸してしまい、今日は比較的素面に近い。

ぼそつと、ザンは漏らす。

「……オレはどうしたらいいんだろうな」

「そんなんオレは知らん。お前がわからん物を、オレが知るわけ無いだろうよ」

「だよなあ……」

「まあ飲め」

「ん」

半分溶けたような様子で、手だけ動かして酌を受けるザン。

「しかしまあ実際のところ、ナオの話は最優先でなんとかした方がいいんじゃない……って」

酌を受けたまま、ザンは寝こけていた。手にした杯が傾き、酒がこぼれ落ちる。

ブギはゆっくり溜息をついて、ヨナを読んで身体を冷やさない為の掛け布を頼み、頬杖について友人の寝顔を眺めた。

「頑張れよ」

軽い口調とは裏腹に、その顔には友人に対する優しさが溢れていた。

## 2

半分に欠けた月が、今日も岬を照らしている。

「魔法、ですか？」

可愛らしく小首を傾げたフラムが問い返す。

「うん。小さい頃に、人魚は魔法を使えるって聞いたから、本当かなあと思って」

「本当ですよ」

珍しく好奇心剥き出しで訊いてくるサラサに、フラムはあっさりと答える。

フラムと会うまでは人魚の存在すら疑っていたサラサだったが、生きた証拠が目の前にあるとなっては、好奇心が抑えられないようだ。

そういうサラサの様子は大変珍しいのだが、フラムに対して仲良くなつてからは、年齢相応な態度しか見せていないので、フラム自身は特に違和感を感じていないらしい。

「でも、魔法……人間は法術って呼ぶでしたっけ？ 人間にも使えるんじゃないですか？」

「ちよつと大きめの集落なんかにいけば、使える人がいると思うんだけどね。わたしの村みたいに小さなところじゃないみたい。婆様は使えるって聞いたことあるけど、詠人の戒律とかなんとかで、使ったところは見たこと無いわ」

「じゃあ、本当に初歩的なもので良ければ、お見せしましょうか？」

「本当に？ すつごく見たいな！」

嬉しそうなサラサの表情に満足したのか、フラムも笑顔で頷く。

深呼吸してから、人の頭ほどの球体を支える形で宙に両手を伸ば

し、フラムは目を細める。その途中、熱心に見つめてくるサラサの視線に気付いて、照れた表情で薄く頬を染める。

「上達すれば、精神集中も一瞬で済むんですけど。わたし、最近ようやくお祖母様から習い始めたばかりなので……。では、いきます」

細く息を吸い込み、ゆっくりとサラサの知らない言葉で何事か呟く。

すると、差し出したフラムの両手の上に小さな光点が現れ、それはみるみるうちに握り拳大へと成長する。

熱を感じさせない、白い光を放つ光球は、フラムの両手の上で静止していた。

「どうでしょうか？」

「へえ……」

物珍しそうにポカンと口を開け、まじまじと光球を眺めるサラサに、少し得意げな顔でフラムは笑った。

「海の中でも使える、灯りの魔法です。こんな事もできますよ」

ちよい、とフラムが人差し指でつつくと、光球はゆっくりと沖に向かって移動した。

ほどよく沖合に出たところで、フラムは先程とは違う言葉を口にする。

漂っていた光球が一瞬縮んだかと思うと、音もなく弾けた。

ゆっくりと消えていく光の残滓を眺めながら、サラサは感極まったように呟いた。

「……綺麗」

サラサの無邪気と言ってもいい素朴な反応に、満足げな顔をしていたフラムだったが、急に表情を引き締めて、居住まいを正した。

「サラサさん、お話があるんですが」

雰囲気が変わった少女に、サラサが怪訝そうに振り返る。

「あの、突然でびっくりすると思いますけど……」

なにか彼女にとっては重要なことを言おうとしているのだろう、何度か迷う素振りを見せていたが、一度視線を下に向けた後、決心がついたのかサラサの目をまっすぐ見て言った。

「私達の部族で、暮らすつもりはありませんか？」

「……え？」

一瞬言葉の意味をとりかねて呆然とするサラサに、熱のこもった口調でフラムは説明した。

「この前、ご両親のことを聞いてから、わたし考えてたんです。サラサさんが人間の村でどういう扱いを受けているかも、想像がつかます。だから、考えた結果両親に相談したんです。そうしたら、お

父様が、サラサさんのお父様を知っていたんですよ！……まあ、そのときに無断外出もばれてしまって、こっぴどく怒られもしたんですけど」

そういう割には、さほど答えた様子もなく、フラムは小さく舌を出す。

「お父様が言うには、昔この辺を荒らし回った魔物は、わたし達の村にもかなりの被害が出たそうです。退治するにも、かなり強力な魔物だったらしくて、迂闊に手を出せずに二の足を踏んでいて。そうしている間にも犠牲は増えていったので、もう戦うしかない、となった時に、人間の剣士様が現れて、その魔物を一騎打ちで退治したんだそうです」

「それって……お父さん？」

フラムはサラサの質問に頷くと、表情を曇らせた。

「でも、剣士様も無事では済まなかったんです。お父様達が駆けつけた時には、魔物もろとも潮の速い場所にはまり込んで流されていくところだったそうです。なんとか追いついた時にはもう……。もう少し駆けつけるのが早ければ、剣士様の命を助けられたかもしれない、とお父様は悔やんでおられました」

思わぬところで聞かされた父の最後にまつわる話に、サラサは言葉を失う。

「……その後、お父さんは？」

「わたし達の習慣では、亡くなった者は海に流されます。海と一つ



になって、わたし達を見守ってくれるように。特に、勇敢に戦った戦士は最高の礼を持って送られます。剣士様……サラサさんのお父様も最高の尊敬を持って送られたと、そう聞いています」

「そっか……」

ならきつと、お母さんとも会えたはずだね。

そつと安堵の息をつく。はつきりとした父の最後を知らなかったことで、心の片隅に引っかかっていたことだ。

「お父様は仰ってました。あの勇敢な戦士は我々の恩人でもある。その忘れ形見が一人で生きているなら、部族の掟を曲げてでも受け入れよう、と。サラサさんが望むのであれば、受け入れるとはつきり約束してくれました」

そこまで言って、フラムはサラサの反応をうかがう。

「……如何でしょうか？」

「如何でしょうかって言われても……」

「わたし達人魚と同じ生活することに不安がありますか？ それなら、なにも心配いらなとお祖母様が保証してくれました」

なにかそういう魔法的な手段があるのかな、とサラサはボンヤリ考えた。

戸惑いを隠せないサラサに対して、フラムは情熱的に言い募る。おそらく、誰よりも話に乗り気なのはフラム自身なのだろう。

ナオのことが少し気にかかったが、自分がいなくなれば、ナオにあれこれと面倒をかけることもなくなる。迷惑をかけずに済む。

断る理由はないはずだった。ほんの少し前までは。

「……ゴメンね。少し……考えさせてもらえるかな？」

口から出た言葉に、誰より驚いたのはサラサ自身だった。

胸をよぎったのは「お前は人間だ」と言った、顎に傷のある浅黒い青年の顔。

自分でもはつきりとは言えない、心の奥の引っかかり。

怒りか、それとも、もっと他のなにかか。

サラサの答えにフラムは多少不満そうだったが、ここは引くことにしたようだった。

「サラサさんにとっても大事なことでしょから、お待ちします。お心が決まりましたら、いつでも言って下さいね」

そう言って笑顔を浮かべるフラムの前を、蛍のように小さな燐光が横切った。

「あ、迎えが来たみたいですね」

「迎え？」

「ええ。さつきも言いましたが、わたしここへは人目を盗んで来てましたので……。お父様にお願いして、サラサさんと会うことは赦していただけたんですが、送り迎えをつけられてしまっています」

ということは、今の燐光はその迎えの人魚が飛ばしたものでしょうか。

夜の海に目を向けたサラサだったが、暗い波間にはそれらしい影も見えなかった。

そしてまた二人は、会う約束を交わしてその夜も別れたのだった。

3

「あのね、ザンがね、あたしとの縁談断りに来たって……」

ぐずぐずと鼻をすすりながら、つつかえつつかえナオが言う。

太陽は中天にかかり、夏も本番に入ったことを示す、強い陽光が白い砂浜を焼いている。

気温は高いが、海を渡ってくる風が間断ないので、それほど暑さを感じない。

いつもの場所で、銚の柄を磨く作業をしていたサラサを訪ねてきたナオは、その正面に正座している。

両膝の上に置いた握りこぶしの上にぽつぽつと涙が落ちて、こぶしを逸れた涙がワンピースの上に染みを作っている。

サラサは作業の手を休めてナオの話を聞いているが、どう慰めたものか困っている様子が見て取れた。

「……あたし、なんか嫌われること、したのかな……？」

正直に言つて、サラサは困り果てていた。

ザンから破談の話を聞いた時から、おそろくなにかしらの話をしに、ナオが訪ねてくるだろうとは予想していたが。

ナオから相談を受けるのが嫌なわけではまったくないが、相談の内容が内容だけに、どう答えたらいいものか想像がつかない。

「あいつには会ったの？」

サラサの問いに、ナオが首を横に振る。

「……なんか、最近歩いてばかりいるみたいで、全然会えないの……。誰にも行き先、言っていないみたいだし……」

「そっか……」

まさかしょっちゅうここに来てとも言えず、サラサは口を濁してしまふ。

そう言えば、今日はまだ姿を見せない。ナオと鉢合わせされると

困るので、有り難いと言えなくもないが。

なんでこんなこと考えないといけないのかと、この場にいない青年に腹を立てつつ、どこか後ろめたい気持ちでサラサはナオに向かつて言った。

「とりあえずは、あいつと直接はなしてからじゃないかな？ 色々悩んでたところで、本人に聞かないと判らないだろうし」

「うん……、そう、だよな」

ナオが一度盛大に鼻をすすり、多少は落ち着いたようなのを確認してから、サラサは柄を磨く作業を再開する。

濡れた革の切れ端に砂をつけ、ごしごしと木肌を磨く。

ようやく泣きの発作を引っ込めたナオが、なにかに気が付いたのか、サラサを少し泣き腫らした目で不思議そうに見つめた。

その視線に気が付いて、サラサがまた手を止める。

「どうかした？」

なるべく優しくサラサが訊くと、ナオは少し首を傾げながら逆に訊いた。

「サラサ、なにか変わった？」

「え？」

「なんだか、雰囲気が少し変わったみたい」

サラサは言葉に詰まった。

ここどころ色々とおったせいで、知らないうちにそれが表に出ているのかもしれない。

ナオが不思議そうな顔で、サラサを見つめる。

ふとナオにならフラムのことを話しても大丈夫か、と思った。

妙に言葉を濁して心配をさせるより、ある程度本当のことを話した方がいいのかも知れない。

余計な心配を増やさないように、フラムの誘いのことだけ伏せておいて。

意を決して、サラサは切り出した。

「ナオ、実はね……」

天幕の中に入ると、老婆が珠の前に難しい顔で座っていた。

「用事だって？」

「ああ」

その側までザンが歩み寄ると、老婆は片眉を吊り上げてその顔だ

を確認すると、すぐに目を珠の方に戻す。

夏の日差しに炙られているはずなのに、黒い天幕の中はヒンヤリとして心地よく澄み、何らかの力が作用しているのは明らかだった。

こここのところの深酒が祟って、少し二日酔い気味なザンの頭に心地良い。

折りたたみ式の椅子を勝手に出してきて、老婆の横に座る。その手元を覗くと、琥珀色の珠の奥で微妙な色彩が揺らめいていた。見るものが見ればメッセージとして読み取れるらしいが、ザンにはちんぷんかんぷんだ。

頭が痛くなってきたそうだったので、老婆の方に目を向ける。

真面目な表情で皺だらけの目もとを珠に注ぐ横顔を見つつ、ザンは昔、師匠と一緒に行った仕事でみた古いミイラを思い出した。

「……なにか、いま失礼なことを考えなかったかい？」

「いや、別に」

急に振り向いて睨んでくる老婆に、明後日の方を向きながら誤魔化すザン。

老婆は、ふんと鼻を鳴らしてから、上体を少し起こして目もとを揉んだ。

「で、用事なんだろ。なんだって？」

「ああ……って、あんた、なんだか酒臭いね。暇だからって飲んでばかりいるんじゃないよ。まったく」

ぶつぶつ言いながら、珠に手をかざすと、その中の色彩が消える。

「朝一番で届いた『伝言』でね……どうやら、働いて貰うことになりそうだよ」

「魔物か？」

老婆が頷く。

「立った今二つ目の『伝言』が届いたんだがね。西の村の守人がやられたらしい」

一瞬でザンの表情が引き締まった。

「死にはしなかったらしいが、しばらくは起き上がれないとさ。とりあえず追ひ払うのには成功したらしいが、魔物はそのままだ姿を消したそうだよ。潮の道から言って、この辺りにくる可能性は高いね。やられたって守人は、坊やが来る前はこの村にも何度か来て貰ったが、若い　がそれなりに腕の立つ男だったはずさ。坊やの腕じゃちよつと手に余るかもね。坊や、『水上歩行』はできたかい？」

「無理だつて。こんな田舎に派遣されるような下っ端で、そんな高等技術使えるやつはほとんどいないよ。知ってるだろ？　叔父さんが特別だったんだよ」

「アレも、ここに来た当初はペーペーだったんだがね。まあいいさ。とりあえず、協会には応援を要請しておいたけど、それまでに被害



が出ないといいが……。そういうわけだから、覚悟だけはしておいとくれ」

「……解った」

ザンは緊張した面持ちで頷く。

「それと、もう一つ」

老婆は身体ごとザンに向き直り、難しい顔で言った。

「サラサのことさ」

「サラサ？」

「真夜中にね、サラサを見かけたってのがいるんだ」

「真夜中？ どこで？」

「人魚の岬さ。沖で夜釣りをしていた奴が、人魚の岬の辺りで変な光が見えたってんで、好奇心に負けて近づいて見たんだとさ。そして、あの娘と人魚の子供が一緒にいるのを見つけたそうさ」

「へえ、どんな経緯で知り合ったんだ？ ここの部族は人間嫌いで有名なのに」

「……坊や、事の重大さを理解してないね？」

脳天気とも言えるザンの答えに、皺だらけの眉間にさらに皺を増やして老婆が溜息をつく。

「坊やは央都暮らしが長くて忘れてるみたいだけどね、ここらみにいに辺鄙な田舎じゃあ、人魚は魔物の同類みたいに思われてるんだ。特に、昔から人魚との交流が皆無に等しいここいらじゃあ、そういう迷信は根深いんだ」

現在、央都のように大きな都市部や、公益の盛んな港町など、異種族との交流がある程度ある場所では、人魚も世界に多数存在する人類の一つとして認識されている。

だが、学問水準のあまり高くない地域では、今でも老婆の言うような迷信の類が、驚く程広く信じられている。

平均的に他種族との交流が少なめの人魚達に関しては、その傾向は特に顕著で、様々な流言飛語の結果起きた悲劇は枚挙に暇がない。「まあ、人魚の件だけなら、それほど焦る必要も無かったんだがね。今までだって、あの娘に関するその類の噂は絶えたことがないんだ。今朝の『伝言』を見るまでね」

珠の上に手を乗せて、ザンを見やる。

「……どういう意味か、解るね？」

老婆の確認に、ようやく理解したザンの顔色が、さっと青くなる。

「時期が悪すぎる。その話を持ってきた奴には、きつく口止めして帰したけど、噂が広まるのは時間の問題だろうね。そこに。魔物が出たなんて話が出れば、連中はすぐに二つの話を結びつける。そう  
なったら……」

ザンが生唾を苦勞して飲み込む。

口の中が乾いていた。

過去に起きたあの一件は、ザンの中にも暗い影を落としている。

老婆は溜息をつく。

「あの娘のことは、坊やに任せるからね。頼んだよ」

「……………解った」

決意の表情で再度頷く。

「言っておくけどね、坊や」

厳しかった老婆の表情が、ほんの少しだけ柔らかくなる。

「命は粗末にするんじゃないよ？ アレだって、なにも一人でいく必要は無かったんだ。あと二日も待てば応援が着いたっていうのにね。……………危なくなったら逃げたっていいんだよ。焦って自分で自分を追い詰めないようにね」

「……………ああ、ありがとう婆様」

強ばってはいたが、老婆に笑顔を見せて、ザンは天幕を出て行った。

老婆もまた大きな溜息をついて、村長に現状の説明をしに行く為

に天幕を後にした。

4

雲行きが怪しくなってきた。

いつの間にか水平線から湧き出た黒雲が、怪物の唸り声のような雷鳴を響かせて、驚く程の速度で空を覆い始めている。

雨が近い。

この時期、取り立てて珍しいことでもないのに、サラサは大して慌てもせず、手早く小物をまとめて帰り支度を終えると、仕上げ中の柄を持って立ち上がった。

歩き出したサラサの心に、様々な事が浮かぶ。

ナオのこと。

フラムのこと。

そして……。

少し前までは、取り立てて深く考える機会もなかった諸々。

一人になってから今までずっと。

なにも変わらない平坦な日々がただ黙々と、いつか自分が死んで消えて無くなる時まで続いていくものだと思っていた。

そう決めつけていたことに気付く。

不思議だな、とサラサは思う。

自分が他人との関係で思い悩むのも、今の生活を振り返る自分も。

少しだけ、そんな自分を笑う。

「サラサ！」

唐突に背後からかけられた声に、浮かびかけていた笑みはすぐに消え、代わりに苦々しい表情が浮かぶ。

ゆっくり振り返ると、随分遠くから声をかけられたような感じがしたのに、もうすぐそこまでザンが来ていた。どうやら走ってきたようだ、その息はほとんど乱れていなかった。

口を開こうとするザンの機先を制して、サラサが相変わらずの無愛想で言った。

「わたしはもう帰るから、好きなだけここにいれば？　すぐに雨が降ってくると思うけど。濡れるのが嫌なら、とっとと帰った方がいいんじゃないの？」

にべもない言葉に、ザンは目に見えて怯むが、引き下がるつもりは無いようだった。

「……お前に話があつてきたんだ」

「わたしには無いよ」

真剣な声色のザンを簡潔に一蹴して、歩き出そうと背を向けたサラサの背中に、ザンの言葉がぶつかる。

「真夜中に、人魚と会つてるんだって？」

ぴたり、とサラサの足が止まった。警戒心剥き出しで振り返る。

「……なんでアンタが知ってんのよ」

「本当なんだな」

「だったら、なに？」

もともと隠すつもりもないサラサは、あっさりザンに問い返しながら、少し考える。

フラムとあっていることを話したのはナオしかないが、それはついさっきのことだ。ザンの耳に入るには早すぎる。

もしかしたら、村の誰かに見られていたのだろうか。

人魚が魔物と同じように見られているのは知っていたし、サラサ自身も割と最近まで同じ感覚でいた。

だが、それほど長い付き合いとは言えないが、フラムが珍しいほ

ど素直で優しい心の持ち主だと実感した今では、例え魔物だろうと  
なんだろうと、彼女を庇うつもりだった。

彼女が魔物だというのなら、父を死地に追いやり、母を見殺しに  
した連中は何だというのか。

サラサの警戒心が判らないわけがないが、それでもザンは決意の  
顔で言う。

「人魚とは、もう、会うな。いや、会わないでくれ」

サラサの爆発を覚悟していたザンだったが、予想外なことにサラ  
サたっぷりと沈黙した後、静かに口を開く。

「……アンタは守人サマだもんね。そう言うと思ったけど。でも、  
それをわたしが聞かなきゃならない義理はないよ。……もし、あの  
娘に手を出すつもりなら、わたしはどんなことをしても止めるから  
ね」

静かな迫力を込めて宣言するサラサに、ザンは一瞬訝しげな顔を  
したが、すぐにその勘違いに気付いて慌てて言い訳する。

「い、いや、違うんだ。その人魚をどうこうしようって話じゃない。  
守人の修行に魔物の勉強も入ってる。魔物と人魚の間に何の関わり  
も無いって事は知ってるよ。そうじゃないんだ」

話してもいいのかどうか少し迷ってから、慎重に言う。

「婆様の話だと、この辺に魔物が出る可能性が高いんだと。もちろ  
んそいつと鉢合わせしないように、夜はなるべく出歩くなってるのも

ある。実は…… お前が、夜中に人魚と会つてるところを見たつて奴がいる。一応婆様が口止めしてくれたらしいが、どうしたつて噂は広まる。どういふことが解るだろ？」

「……解らないわ」

サラサが険悪な態度を崩そうとしないので、ザンにはとぼけているのか本当に思いつかないのか判断がつかない。

「オレは人魚が魔物じゃないことを知ってるが、村の連中はそうじゃないつてことだ。噂が広まって、その上に魔物が出て被害が出たりしたら、それがお前せいにされちまうかもしれない。そうなら……」

言い淀んで、ザンは足下に視線を落とした。

「あの時と、同じことが起こるかもしれないんだぞ……」

サラサの肩がぴくりと動く。被った布がずれて、その表情が完全にその奥へ隠れる。

背を向けながら発せられたサラサの声は、ザンの不安を煽るほどに静かで落ち着いていた。

「……おなじじゃないよ」

「なに？」

「おなじじゃないよ。もう、お父さんもお母さんもない。誰もわたしの為に犠牲にならない。……わたしが消えれば、それで済むよ」



「サラサ！」

「うるさいっ！」

思わず声を荒げたザンに負けない声で、サラサが噛みつくような勢いで振り返りつて怒鳴る。

その勢いでボロ布が頭から外れ、真珠色の髪と白磁の肌、深紅の瞳が現れる。

怖いほどに整った顔には、激情が揺らめいていた。

「前にも言ったでしょうが！ アンタになにが解るの！ わたしに関わるな！ わたしを放っておいてよ！」

「放っておけないんだよっ！」

どこか悲痛な色を滲ませたサラサの態度に耐えきれず、ザンも怒鳴り返す。

明らかにそれまでとは違う言葉の響きに、サラサも口をつぐむ。

ザンは感情を爆発させたことに恥じ入ったのか、少し赤面しつつ一転して静かに続ける。

「……お前は、もう忘れちゃったかもしれないけど……。昔、お前と約束したんだよ。守ってやるって。なにがあっても、お前を守るって……だから……」

口にしているうちにいたたまれなくなってきたのか、語尾が消えていく。

サラサはそれを耳にした途端、ひどく傷ついたような表情で背中を向けた。

それは、ずっと昔に交わされた約束。

子供の頃の約束だ。

サラサにとっては破られてしまった約束。

忘れるはずなどない。

忘れられなかったからこそ。

「……いまさら、なによ……」

サラサの背中が頼りなく震えた。

「……ひとりに、したくせに」

その言葉は、怒りと拒絶という名前の堤防から漏れたひとしずく。

「……お父さんがいなくなった時も」

忘れられなかったから。怒って見せて拒絶しなければ、閉じ込めておけなかったもの。

「……お母さんがいなくなった時だって」

サラサの足下、乾いた砂の上に、ポツリと黒い染みができる。

次々に増えていく。

雨はまだ降り始めてはいない。

「……寂しくて、悲しくて、苦しくて……どうしようもなかったのに……」

最初のひとしずくが漏れてしまえば、後は崩れていくだけ。

「……いなかったくせに！」

怒りも、拒絶も、その上に乗せていた物は、すべて崩れて流されていく。

「わたしのことで、いなくなったくせに！」

後に残るのは、哀しみと孤独に満ちた、幼い魂だけ。

塗り固めて、押し込めて、遠ざけることでしか守れなかった心。

気持ちは溢れ出し。

溢れ出した気持ちは、しずくになって落ちていく。

「そんなの、しんじられるわけ……ないじゃない……！」

それは初めて晒された本当の気持ち。言葉にできなかった言葉。

サラサの哀切に満ちた背中を眺めるザンの顔は、蒼白に近かった。頭の中を、ブギの言葉がぐるぐると回っている。

大きな失敗を一つ……いや二つか？　してるんだ　。

ようやくその意味を理解した。

自分が知らずに犯していた過ちに、ようやく気が付いた。

この少女を守るために必要だったのは、戦う力などではなかった。必要だったのは、ただ側にいてやること。ただ、よりそって温もりを与えてやることだけ。

戦う力を必要としたのは、自分だ。

少女のためなどではない。

逃げていた。

逃げたのだ。

無力な自分から。

無力であることに耐えられない、自分自身の心から。

村を出るなら、なぜ少女を連れて行かなかった？

できたはずだ。

やらなかったのだ。

少女を連れていき、その先で少女を守り抜けないことが、恐ろしかった。

臆病者だったのだ。それはおそらく、今も。

少女の為だと言いつてをして、最悪の卑怯と逃亡を犯したことに  
も無意識で。

守ると口にしながらそこから逃げだし、他の何よりも少女の心を  
傷つけていたのは自分だ。

足下が揺れる。グルグルと景色が回っていた。

少しでも力を抜けば、砂浜の上に倒れてしまいそうだ。

手を伸ばせば届く距離に、少女の背中があった。

その背中には、孤独と寂寥だけがあった。

簡単に届きそうな距離が、とてつもなく遠く感じる。

恐怖がこみ上げてくる。

やはり、自分は臆病者だ、とザンは骨身に染みて理解する。

だからといって、このまま卑怯者の臆病者でいて良いはずがない。

もう、手遅れなのかも知れない。

無駄な足掻きなのかも知れない。

なにかをする資格すら、すでに自分にはないかも知れなかった。

それでも、いまここで出来ることをやらなければ、最悪のまま終わってしまう。

指一本動かすのも、足を一步踏み進めるのも。

今まで経験してきたどんなことよりも、力と勇気が必要とした。

雨が、ぽつぽつと降り始める。

驚く程思い通りにならない両手を差し伸べ、地面に張り付く足を進め、少女の両肩に触れる。

その肩は弱々しく震えるが、そのまま逃げもせず、かといって振り向きもしない。

意を決し、可能な限りの優しさと、細心の注意を持って。

乾いた砂で出来ているかのように、そっとその背中を抱きしめた。

なにを口にしても、言い訳にしかないような気がした。

想いは次々と浮かび消えていく。

だが、本当に言わなければいけないことは一つしかなかった。

たった一言だけ、全身全霊で絞り出す。

「……………」

少女にしか聞こえない声で呟かれたのは、短く不器用な謝罪の言葉。

真にその罪を自覚した者の、懺悔の言葉だった。

それは、少女の心に残っていた僅かな強がりや、綺麗に吹き飛ばした。

サラサは泣いた。

長い間、我慢し続けていたすべてを吐き出すように。

大きな声で、幼い子供のように。

それでも、青年にすぎることなく、両の拳を力一杯握りしめて。

すがってしまえば、もう二度と立ち上がることができなくなってしまうそうだったから。

雨が勢いを強くする。

急速に強まっていく雨は、流れるものを、二人の間にあつたささやかで強固ななにかを、まとめて洗い流し、掻き消していく。

そして。

誰かが走り去る、小さな足音もまた、掻き消してしまった。

\*\*\*\*\*

『あなたは、わたしのことこわがないんだね？』

重なり合う木々の枝葉が作り出す日陰の下、ボロ布を被った幼い女の子が言った。

『みんな、わたしのことこわがるのに……』

下を向いているので表情は伺えないが、女の子が寂しげな顔をしているのは簡単に予想がついた。

『なんで、こわがるんだよ』

少年はあぐらをかいて、身体を前後に揺らしながら言う。

『こわくないじゃん』

半分が嘘で、半分が本当。

少年も自分の目で見るまでは、この村はずれに住む少女を怖がっていた。



無責任な大人達が口にする、悪意ある噂話を信じていたからだ。

でも、今は。

『だって、そのかみも、めも、ぼくはきれいだとおもっよ』

『そう……かな？』

『そっだよ！』

被った布越しでも、女の子が恥じらう雰囲気伝わってくる。

『……ありがとう』

少年からは見えないが、きっと花が開くように可憐な笑顔を浮かべているだろう。

少年はそれが見たかった。

『ねえ、そのぬのをとってみてよ』

『え？』

『おねがい』

『……じゃあ、少しだけね』

女の子は少し迷ってから、布を肩まで下げた。

現れたのは、満月を削りだして作ったように可憐で美しい容貌。

しかし、その深紅の瞳を湛えた目もとに、やや困ったような雰囲気があったのが少年には少し残念だった。

『こんなにきれいなんだから、かくさなきゃいいのに』

『でも、ずっとおひさまにあたっていると、まっかにはれていたいんだもん……』

そう言って、悲しそうに目を伏せる。

少年はそんな顔が見たいわけではないのだ。

『それに……かくしてないと、みんなこわがるから……』

『ぼくは怖がらないよ!』

女の子の語尾に被せた大きな声に、少女は顔を上げる。

『ぼくは、ぜったいぜったいこわがらない!』

『……ほんとうに?』

『うん!』

取れてしまいそうな勢いで、首を縦に振る。

『ぼくがきみのこと、まもってあげる! ずっといつしゅにいるよ!』

少年の顔を見つめていた女の子の顔が、ゆっくりとはにかんだ笑顔  
顔を浮かべる。

『……ありがとう』

それこそが、少年が見たいと思った笑顔だった。

遠い日の約束。

幼いからこそ、簡単に口にできた言葉。

幼いからこそ、純粹に口にできた言葉。

木々の間から垣間見える海が、きらきらと輝いていた。

遠い日の出来事。

## 四章

### 四章・魔物

1

サラサにとって、目覚めはいつも不快感と一緒に来た。

寝起きが悪いわけではなく、目を覚ますということそのものが、嫌いだっただけ。

悪夢にうなされることがあっても、目を覚まさない方がマシだと思っていた。

暗い小屋の中で目覚め、周りを見回せば、孤独がつのるばかり。

だから、人の温もりに包まれて、それらの気持ちを伴わない目覚めは、初めての経験だった。

うつすらと目を開けると、見慣れた小屋の中、まだ火を上げている炉の薪が映った。

頭と地面の間と、背中全体に温もりを感じる。

その温もりの持ち主を起こさないように、サラサはそつと身体を起こした。

なめらかな素肌を滑った布が太股の上に落ち、一糸まとわぬ上半身が現れる。

部屋の中は炉の火に照らされて意外に明るい。薪の燃え方を見ると、寝入ってからさほど時間は経っていないようだ。

少し身動きすると、身体の奥に残った鈍い痛み of 残滓を感じる。

初めて他人を受け入れた痛み。

痛みなのに、それは不思議と心を満たしてくれた。

視線を下に向けると、すぐ横で寝息を立てる顎に傷のある青年の顔が目に入る。

まるで、寝ていてもその腕の中にあつたものを守るように、身体をほんの少し丸めていた。

その寝息は規則正しく静かで、微かにゆっくり動く腹部を見なければ、死んでいると勘違いしてしまいそうだった。

サラサは相手を起こさないようそつと身体を離して、掛けていた布を青年に掛け直してやる。

そのまま、すぐ側で青年の身体をつぶさに眺めた。

傷だらけの身体だ。

さつきまでサラサの頭が乗っていた腕も、足も、身体も。傷ついていた場所を探す方が簡単だった。

ほとんどは古傷で、それほど目立つものは少ないが、青年の過去してきた時間が過酷なものだったであろうことは、一目でわかる。

一際目に付く、腕の内側から破裂したような大きな傷を見、青年の顎にある、おそらく一番古い傷にそつと触れる。

痛かっただろう。

辛かっただろう。

怖かっただろう。

無数の傷は、それでも青年が逃げなかった証拠だ。

痛くとも、辛くとも、それから逃げなかったのは何故か。

じわり、と胸の奥が疼く。

それは、じわりじわりと、ゆっくり広がっていく。

決まっていた。

じつと見つめる、青年の幸せそうな寝顔が滲む。

「……謝らなきゃいけないのは、ザンじゃないよね……」

小さな眩きと一緒に、一粒がこぼれ落ちる。

不意にザンが小さく唸り、掛けられた布を胸の中に巻き込んで寝返りを打った。

その拍子に、ザンの背中に赤く引かれた何本かの細い引つ掻き傷が目に入り、瞬時にサラサの顔が深紅に染まった。

慌てて背中を向け、自分の頬をペチペチ叩いて火照りを冷ます。

心臓がバカになったように早鐘を打つ。急速に脳裏に戻ってきた少し前の時間を思い出し、サラサは羞恥に悶える。

もの凄く、もの凄く恥ずかしいことをしたような気になってきた。

なんでこうなったのか理解できない。

いや、もちろん嫌だったとかそういうことじゃないけど。

でも……。

一通り無言で煩悶してから、なんとか落ち着きを取り戻し、深呼吸する。

ちらりとザンの背中を振り向くが、起きる気配は無い。

もう一度深呼吸してから立ち上がり、炉の側で乾かしていた衣服の様子を見て、すっかり乾いているのを確認すると手早く身につける。

新調したばかりの銚を手にも、そっと小屋を出る。

雨上がりの夜空は綺麗に澄み渡り、一面にきらめく星々がちりばめられていた。

その時、急に襲ってきた悪寒に、サラサは身を震わせた。

雨に打たれたせいで風邪でも引いたのだろうかと思ったが、今日はフラムとの約束があった。

それほど深刻な感じでもないし、なによりフラムとの約束を破るのは気が引ける。

歩き出すと、どこかバランスが狂っているような身体感覚に少し苦しいし、サラサは小走りに急いだ。

サラサが待ち合わせの岩場につくと、それを見計らってフラムが現れる。

「こんばんは」

にこやかにサラサが言えば、フラムもにこやかに返す。

いつものようにフラムが水際に腰掛け、サラサもその隣に座る。

「サラサさん、なにか良いことありました？」

開口一番フラムが口にする。



「え？　なんで？」

「なんだか、嬉しそうですもの」

「そう……だね」

サラサもフラムに負けない笑顔で答えた。

「うん」

「なにがあっただんですか？」

「え」

すつとサラサの頬に血の色が昇る。

「……内緒」

「意地悪しないで教えて下さいよう！」

「そのうちにね」

恥ずかしそうに意味ありげな態度を崩さないサラサに、フラムがふくれっ面になる。

「もう、いいです！」

ごめんごめん、とサラサが笑いながら謝る。

そんな他愛のない会話がしばらく続く。

「そついえばですね、サラサさん」

会話が一段落ついたところで、フラムが申し訳なさそうな顔で切り出す。

ん？ とサラサが顔を上げた。

「しばらく、会えなくなりそうなんです」

「どうかしたの？」

「実は……質の悪い魔物がこの辺の海に出没し始めているみたいです」

珍しく真剣な表情で説明するフラムに、サラサも表情を引き締める。

「お父様が、それと戦う準備を始めました。本当は今日もでかけてはいけないと言われたんですが、サラサさんとの約束があったので……」

「魔物が出るかもって話は聞いてたけど、そっか」

「あ、でも、もう会えないってわけではないですし。魔物の件が一段落すれば、またこうして会えるようになります」

「うん、そつだね」

「じゃあ、魔物がなくなった後、最初の満月の夜、またここで」

「わかった」

そして、微妙な間。

「……あの、サラサさん」

フラムが控えめに訊いてくる。

「この間の話、考えていただけましたか？」

「この前の話……」

人魚の村に身を寄せるといふ話のこと。

耳にした時は、それもいいかと思ったが、今のサラサにはその時の気持ちは無くなっていた。

顎に傷のある顔を思い浮かべながら、フラムには本当に悪いとは思っただが。

「ごめんね。やっぱり、こっちにいるよ。こっちに大切なものができちゃったから……ね」

「……そうですか」

残念そうに下唇を噛んでうつむくフラムに罪悪感がこみ上げるが、仕方がない。

フラムはしばらくそうしてうつむいていたが、やがて顔を上げると笑顔を浮かべてサラサに尋ねた。

「その大切なものって、さっきの話と関係があるんですね？」

「えっ、いや、その」

いきなり核心を突かれ、あっという間に赤面したサラサは、分かり易すぎるほど動揺した後、蚊の鳴くような声で肯定した。

「……うん」

その態度で大体の事情を察したのか、フラムはさらに笑みを深めた。

「良かったですね」

「……ありがとう」

我がことのように嬉しそうなフラムを、サラサは優しく抱き寄せた。

「本当に、ありがとうねフラム。これからも、よろしくね」

「はい」

サラサの腕の中で、フラムは恥ずかしそうに、だがしっかりと頷いた。

その時、波の音ではない水音と人の気配。

驚いた二人が振り返った。

なにかが襲いかかってきたのだと理解した瞬間、サラサの頭部に衝撃が走り、その意識は急速に遠のいていった。

2

目を覚ますと、まず見慣れない壁が目に入った。

「?!」

驚きと共に跳ね起きる。

身体は起きているが、まだ頭が半分寝ているのか、よく状況が把握できない。

周りを見回す。

粗末な小屋の風景。炉の炎はすでにかなり小さくなっているが、その他はさして目に付くものもない。

一言で表現すれば殺風景だった。

少しずつ、頭がはつきりしてくる。

ガシガシと短い髪に手を突っ込んで、ザンは天井を見上げた。

みるみるうちに顔が真っ赤に染まったかと思うと、頭を掻く手の速度が上がる。

「……いや、まあ、その、あれだ」

誰もいないのに、なんとなく口にする。

雨に降られてサラサの小屋まで避難した後。諸々の時間。寝入る前になにがあつたのかを思い出して、頭を抱えて転げ回りたくなる衝動に襲われる。

激烈に恥ずかしい。

ちゃんとやれたか心配になる。

央都にはその手の店も多かったし、先輩に誘われたこともあつたが、なんとなく罪悪感があつて、そういうところに足を運んだことは無かつた。

ただただ必死だっただけで、余裕なんて欠片もなく。そういう経験も少しはしておけば良かったのかと、真剣に悩みそうになつたところで、ようやくサラサがいないことに気が付く。

「サラサ？」

呼びかけながら、改めて小屋の中を見回した。

その拍子に、背中 of 引つ掻き傷が少し痛み、また赤面する。

部屋の中にはザンしかおらず、何度見回そうが殺風景な景色は変わらない。

サラサと知り合ったのは随分前の話だったが、こうして家の中に入るのは初めてだった。

そのことに感慨を覚えるよりも先に、この殺風景な小屋で、何年もの間孤独に寝起きを繰り返していたサラサの心情を思うと、ザンは身が縮むような思いがした。

それにしても、すぐ隣で寝ていた相手がいなくなっているのに気が付かないとは。

敷布の上であぐらをかき、顔を押さえて反省の溜息をつく。

厳しい修行の成果で、物音や気配にはかなり敏感になっていたはずなのに、思いつきり寝こけてしまった。

「師匠にばれたら、折檻じゃすまねえな」

まあ、緊張してたのだろう。なにしろ初めてのことだったのだ。

あまりに必死すぎて、よく覚えていない部分が多いことに、多少損した気分になりながら立ち上がる。

服が乾いているのを確認して身につけながら、傍らに置いていた長剣を腰に差す。

火が消えないように、炉に薪を何本か放り込んでから小屋を出る。

サラサが下手に遠出して、魔物と出くわしてたりしていれば大変だ。可能性としてはそう高くないと思うが、万が一ということもある。

探さなければ。

用を足しに行ったのならばすぐ帰って来るだろうが、炉の薪の様子からすると、遠出をしている可能性がある。

サラサが夜中に遠出するとなると、心当たりは一つしかない。もちろんそこに行っていない可能性もある。それならばそれでいい。

まさかサラサとこうなるとは考えていなかったが、最初からサラサに人魚と会わないことを承知させられるとは思っていなかった。

人魚に対する偏見云々は置いておくとしても、人魚と会うこと自体に危険はないが、その為に夜中の海辺をうろつくのは、いつ魔物が現れてもおかしくない現状では危険極まりなかった。

だから、何とか説得して護衛について行くことだけでも承知させようと思っていたのだが。

その話を切り出す前にあぁなってしまい、機会を逸してしまった。

心のどこかで、サラサが出かけようとすれば気づけるという過信があったのかも知れない。

ザンは舌打ちして自分に毒づくと、人魚の岬に向かって足を速めた。



林を駆け抜け砂浜に出ようというところで、ザンの目の前にふらりと歩み出た人影があった。

ザンが慌ててたたらを踏み立ち止まると、驚きに目を丸くした。

「ナオ？」

立木の影から現れたのは、確かにナオだった。

ただ、その目は泣き腫らしたように赤く、どこか虚ろな印象があった。

「ザン……」

「どうしたんだ、こんな時間に、こんなところで」

「あ、あの……ね、あのね、ザン……」

なにかを言いたそうに口を開けたり閉じたりするが、意味ある言葉は出てこない。

焦れたザンは、ナオの両肩に手を置いて言い含めた。

「すまん、ナオ。今、急いでるんだ。それと、もう聞いてるかもしれないが、魔物がこの辺に出る可能性がある。しばらく村から出ないようにした方がいい。悪いな、気をつけて帰れよ」

早口に言って、走り出す。

「ザン！」

その背中に、強い響きを持つナオの言葉がぶつかる。

「サラサのところにいくのね？」

立ち止まったザンに、問いが投げられる。

ナオの妙な態度に不審を覚えたザンが振り返ると、ナオが俯いたままボソボソと言った。

「……狡いよね。そんなこと一言も言ってなかったのに……。あたししか、あたしだけが友達みたいな顔してさ……。きっと、あたしのこと、こっそり笑ってたんだ」

綺麗に焼けた小麦色の両肩が細かく震えていた。

「……今日ね、サラサに人魚のこと聞かされてね。その話してる間、サラサとっても楽しそうだった……。すごくね、シヨックだった。サラサには、あたししかいないと思ってたのに……。それで、村に戻ったら、ザンがこっちにいったって聞いたから、追っかけてきたんだけど……。そしたら……。」

ぎくりとザンの心臓が跳ねる。

見られたのか。

「ナオ……。」

どことなく後ろめたい気持ちで呼びかけると、ナオが顔を上げる。

その顔には引きつった笑みが浮かんでいた。

「ねえ、嘘だよな？ ザンはサラサが好きなのじゃないよね？  
ただ……、そう……同情してるだけ、なんだよね？」

両手を胸の前で絞りながら一步を踏み出すナオに、思わずザンは  
一步下がる。

静かで縋りつくような声色だったが、なにか違和感があった。

気圧されてさらに下がりながら、ザンは痛みを我慢するような顔  
で唇を噛み、ナオの横を走り抜ける。

「すまん！」

「ダメだよ！」

背中にぶつけられた声の、ナオからは聞いたことのない強烈さに  
驚き、ザンは思わず立ち止まって再度振り返る。

両手で薄手のワンピースを握りしめるナオの顔は、悪意で歪んで  
見えた。

「サラサってば、馬鹿だよな。言わなきゃいいのに……。前にブギ  
から借りた本で読んだことがあるの。人魚って、食べると不老不死  
になるって迷信があるんだってね？ それを信じて、馬鹿みたいな  
大金を出すお金持ちもいるんだって。……村でぶらついてる連中に  
話したら、大喜びで飛びついてきたよ」

「ナオ、お前まさか……」

「サラサって馬鹿だからね、きっと死に物狂いで抵抗するわ。……多分、殺されちゃうね。だって、村でサラサのこと人間扱いしてる人なんていないもの。そうするのに、躊躇いなんて無いんじゃないかな」

「ナオッ!!」

ナオの顔を見ていられず、顔を伏せたザンの怒鳴り声にも、ナオは怯んだ様子は無い。

ひよっとしたら、ザンの言葉など耳に届いてすらないのかもしれないなかった。

「ねえ、ザン。どうして、あたしじゃダメなの……?」

歪んだ表情は、いつの間にか媚びるようなものに変わっていた。

ナオは立ちすくんでいるザンにゆっくり近づくと、身体を預けて寄り添い、伏せられたザンの顔を見上げた。

「あたしを選んでよ、ザン……。サラサなんかと一緒にたつて、幸せになんかなれないよ? サラサにできることだったら、あたしにだって……」

言いながら、服の胸元に手を掛けたナオは、急に支えを失って砂の上に転がった。

「ザ……っ?!」

自分を見下ろすザンと目があつた瞬間、ナオは言葉を失った。

その目は確かにナオを見ていた。

浮かんでいるのは、燃えるような怒りではなく。

凍りつくような蔑みでもなく。

ましてや、愛情などでもなかった。

そこにあつたのは、夜の海のように孤独で深い哀しみ。

信じていたものを失った哀しみと、激痛にも似た後悔だった。

それを見た少女は、ようやく理解した。

いや、理解していたのにそれを認められず、足掻いていただけだったのだろつ。

もう二度と、自分の望んでいたものは手に入らないこと。

それどころか、失つてはいけないものを、自分から手放してしまつたこと。

なにも言わず、その場から逃げるように走り去るザンの背中を、なにも出来ずに見送り。

少女は嗚咽を漏らし始めた。

手に入らなかったものを想って。

失ってしまったものを想って。

少女は、ただ、涙を流し続けた。

3

「いやあつ！ 放してっ！ 放して下さい！」

フラムの悲鳴が、消えかかっていたサラサの意識を引き戻す。

「おとなしくしやがれっ！」

粗野な男の濁声が耳に飛び込んでくる。

痛む頭を押さえる。ぬるりとした感触があった。

ゆらゆらと揺れる視界の中でなんとか上体を起こすと、無精髭の大男が暴れるフラムの腕と首を押さえて動きを封じているのが目に入る。

視界の隅で、麻袋やロープを手には岩場の影からさらに二人の男が出てくるのが見えた。

ふらつきながら、手に当たった銚子を杖代わりに立ち上がる。頭の

傷は今のところ灼熱感だけで、激しい痛みはまだ来ていない。それよりも、揺れる視界の方が問題だった。

「……やめなっ！」

サラサが怒鳴りつけると、フラムを押さえていた大男が、無精髭にまみれた顔に下卑た笑いを浮かべて振り向く。

「なんでえ、案外丈夫じゃねえか。手加減なしでぶん殴ったのによ」

「サラサさん！ 血が……！」

こちらをみたフラムの顔が、いまにも泣き出しそうに歪む。

こめかみをつたう生暖かい感触が頬を通り、顎の先から地面に落ちていくのを感じる。

「お。魔物の子っていうのは、生意気に赤い血をしてんだなあ」

「……なんだって？」

「知らねえのか？ 魔物つてのは黒い血をしてるそうだけ。なあ？」

本気で言ってるのか冗談のつもりなのか分からない態度で、隣にやってきた細身の男に問い掛ける。

細身の男は特にそれに答えず、足下に落ちていた棍棒を拾い上げる。どうやら、サラサはそれで殴られたようだ。

一番送れてきた小男が、手にしたロープでフラムを縛り始める。

三人ともサラサの知らない顔だ。なんでここにいるのかも解らないが、今はそんなことを気にしている余裕はない。

「あんたら……いったいなんのつもり?!」

怒気の含まれたサラサの言葉にも男達のニヤニヤ笑いは崩れず、逆に小馬鹿にした笑い声を上げて言ってくる。

「なんのつもりだつてよ」

細身の男が棍棒を構えながら仲間を振り返る。

「決まってるじゃねえか、なあ?」

「役にたたねえ守人サマに代わって、魔物退治に来たんだよ」

自らの言葉を微塵も信じていないのが丸わりの口調。

「お前らあれだろ? 村を襲う算段でもしてたんだろ、なあ?」

いかにもたったいま考えましたという態度だった。

「……その子を放しなさい」

怒りを抑えたサラサの言葉に、男達はさらなる嘲笑を浴びせる。

「必死だなあ、さすがによ」

今にも倒れそうになりながらも、なんとか立っているサラサの震



える膝を見ながら、細身の男が言う。

「そりやそうだろ。同じ重さの金と引き替えにできるとなりや、必死にもなるうつてもんだ」

「しかしいけねえなあ、魔物の子のくせに同じ魔物仲間を売ろうなんてよ」

「そういう邪悪なことを考えてるから魔物なんじゃねえか？」

暴力に酔っているのか、勝手なことを言いながら耳障りな爆笑を上げる男達に眉をしかめるサラサ。

「……………なんの話よ？」

訝しげに聞くサラサに、男達はさも面白そうに言う。

「おやおや、とぼけるんじゃないよ。確かに俺たちやこんな田舎の出だが、それでも中央都暮らしはそれなりに長かったんだぜ？」

「あの娘とも、おおかた取り分でも揉めたんじゃないのか」

「だから、なんの話よ！」

自分勝手に言葉を垂れ流す連中にいらつきながら、怒鳴る。

「とぼけてんだか、本当に知らねえんだかな。じゃあ教えてやるよ」

大男が、二人がかりで取り押さえられているフラムを親指で指し示す。

「人魚ってのはな、不老不死をもたらすんだよ」

「偉そうに。あの娘に聞くまで知らなかったくせによ」

「うるせえよ！」

茶化してくる小男に笑いながら返し、話を続ける。

「まあ、魔物退治ついでに、余録に預かるうってわけだ」

「不老不死？」

ぞつとしないな、とその単語を聞いた瞬間サラサは思った。

終わりのない生など、苦痛の終わらない拷問のようなものではないか。

そう思つと同時に、そんなものに興味を持つ人間がいること自体に純粋な驚きを感じる。

「そうよ。人魚の肉を食った奴あ、不老不死になるんだとよ！」

「食つ……?!」

あまりのことに、サラサは絶句する。

「魔物を食うなんてぞつとしねえがな。金持ち連中の考えることはわかんねえよな」

ニヤニヤ笑いを深めながら肩を竦め、また示し合わせたようにゲラゲラと男達が爆笑する。

「いてえ！」

突然小男が悲鳴を上げる。その親指から血が流れていた。

猿ぐつわをしようとしたところで油断していたのか、フラムに噛みつかれたのだ。

両手を縛られたまま地面に転がされたフラムは、気丈にも男達を睨みつけた。

海の色をした双眸には怒りの色が宿っている。

「サラサさんもわたしも、魔物などではありません！ わたしたちが魔物だというのなら、貴方たちのような汚らわしい人たちはなんだというのですか！」

毅然として言い放つが、それは男達の怒りを呼ぶことしか出来なかった。

「このガキがつ！」

力任せに震われた小男の拳が、フラムの顔をとらえた。

鈍い音が響き、くぐもった悲鳴を漏らして岩場に叩きつけられたフラムは、鼻血を流してぐったりと動かなくなった。

それを見た瞬間、サラサのうなじの毛が逆立つ。

頭が赤熱してなにも考えられなくなった。

「おい、あんまり手荒く扱うんじゃないぞ。死んじまって値が下がっちゃうたらどうすんだ」

「お、おう。すまねえ」

さすがにやり過ぎたとも思ったのか、小男が身を引く。

叫びと打撃音が上がった。

驚いた大男達が振り向くと、細身の男がサラサの銛で横殴りにされて転がったところだった。

腹中のすべてを吐き出すような叫びの元はサラサ。

叫びの尾を引きながら獣のような素早さで大男へ肉薄するサラサの深紅の両目は、冷たい殺意にぎらついていた。

「うおおっ!」

喉元めがけて突き出された銛を、大男はみつともなく転がりなら避けた。

空振りした銛を引き戻し、流れた体勢を整えながら振り返ったサラサが、もう一撃を狙う。

「この野郎っ!」

サラサの二撃目よりも、寝転がったまま突き出された男の足の方が僅かに早かった。

自分から飛び込むような形で腹を蹴られたサラサは、身体をくの字に折り、再度岩場に勢いよく転がった。

腹を押さえて呻くサラサを、駆け寄ってきた小男と細身の男が何度も蹴りつけた。

頭を蹴られて意識が飛びそうになり、腹を蹴られて中身を吐き出す。背中も手足も全身くまなく蹴られた。

すぐに大男もそれに加わり、やがて男達が息を切らせる頃には、サラサに立ち上がる気力も体力も無くなっていた。

「まったく、魔物の子のくせによぉ！」

ボロ雑巾のようになってしまったサラサに唾を吐きかけながら、大男はその背中をさらに踏みつける。

苦鳴を漏らす体力も残っていないサラサの喉からくぐもった音が漏れるが、そのまま動く気配は無い。

「さつき話してみても、なんとなく状況が飲み込めたぜ。おい、良いことを教えてやるよ」

乗せた足を揺すってみるが、やはりサラサは無反応だ。すでに気を失っているのかもしれないが、大男は構わずに続けた。

「俺達にな、お前らのことを教えたのは、詠人のババアのところ」

出入りしてる、網元のところの小娘なんだよ」

サラサの背中がぴくりと震えた。

朦朧とする意識の中で、サラサは今の話を反芻する。

拒絶反応のように意識が拒否するのを感じながら、言葉の意味を理解しようとする。

ナオが……？　なんで……？

グルグルと回る視界と同じく、疑問が頭の中を回る。

「なんだかしらねえが、よっぽどの娘の恨みを買ったみてえだな？」

蔑みのたっぷり含まれた大男の声は、サラサに届いてはいなかった。

どうして。

それだけがサラサの胸中を支配していた。

直感でも、理性でも、男の言葉が真実だと判った。

ほんの少し前まで体中に満ちていた怒りなど、どこかへ霧散してしまった。

痛みでも、悲しみからでもない涙が、知らずに滲んでいく。

「なあ、で、こいつどうする？」

「頼まれたとおりに、楽しんだ後で殺すか」

「げ、俺はイヤだぜ。魔物の子なんかと」

「なに言ってやがる臆病もんが。土産話どころか武勇伝だぜ」

男達の身の毛のよだつ会話も、サラサの耳には届いていない。

今サラサの胸を満たすのは悔しさだ。

悔しくて、悔しくて、堪らなかった。

父が死んだことも。

母が死んだことも。

自分が魔物の子と呼ばれることも。

フラムが魔物と呼ばれて、下らない事の犠牲になってしまっことも。

ナオのことも。

すべてが悔しかった。

抗いきれなかった。

もう身体も動かない。ただこうして転がっているだけ。

涙が一筋流れる。

男達に気取られないように、嗚咽を噛み殺す。

だが、噛み殺しきれなかった言葉が、涙と一緒に微かに溢れる。

生まれて初めて、他人に求めた。

「……………ザン……………助けて……………」

誰にも届くはずのない、小さな小さな声だった。

「おい」

それは、静かだが聞く者を竦ませずにはおかない、焼けた鉄のような怒りの声だった。

肉と骨を打つ鈍い音と、カエルが潰れるような悲鳴が続けて三つ。

そして、不意にサラサの背中が軽くなる。

「あ……………」

痛む全身を無理に無理に起こして見上げたサラサの目に映ったのは、顎に傷のある浅黒い青年の顔。

みるみるうちにその姿が滲んだ。

「ひでえな……………無理に起きるな」



優しい声。

しゃがみ込んだ青年が手を差し出し、サラサの身体に触れる。そこから、日向のような温もりが体中に広がっていく。

その温もりが届いた場所の痛みが次々に薄れていく。

不思議に思ったサラサがザンを見ると、月明かりの下でその身体がボンヤリと発光しているのが判る。

その光はよく見れば、サラサの身体も包んでいた。目を落とすと、腕の内出血が見る間に薄れていくところだった。

「骨がやられて無かったのが幸いだな……」

あらかたの傷が薄れたところで、ザンはサラサの肩を抱いて囁いた。

「すまん。遅くなった」

その申し訳なさそうな顔を見つめるサラサの目から、今度は大粒の涙がぼろぼろとこぼれる。それを隠す為に、ザンの胸に顔を押しつける。

「まだ、どっか痛むのか？」

心配そうに問い掛けてくるザンに、サラサは顔を押しつけたままかぶりを振る。

「起きたらいなかったから、心配したんだぞ」

「……うん」

目元をこすりつつザンから身体を離し、差し出される手を借りて立ち上がる。

「てめえ、どこから湧いて出やがった?!」

殴られて吹っ飛んだとは思えないほど離れた場所で、顔面を押さえてのたくっていた大男が、ようやく立ち上がって怒鳴る。よく見ると前歯が三本無くなっていた。

同じく倒れていた二人も、頭を振りながら立ち上がり、無残に変形した顔面でザンを睨みつける。まるで、得物を横取りされた野良犬の風情だ。

「うるせえ」

ザンの低い恫喝に、男達がピタリと黙り込む。

「……てめえらこそ、覚悟はできてるんだろうな?」

髪が逆立つような怒りの形相と怒気、それにも関わらず静かすぎる口調に、それを向けられてるわけでもないサラサまで竦み上がりそうになる。

男達も目に見えて怯んでいるが、数の有利で気が大きくなっているのか、無謀にも踏みとどまっていた。

「けっ！ 魔物を殺すのが仕事の守人サマが、その魔物にたらし込まれてたら世話ねえぜ！」

べっ、と血の混じった唾を吐き出しながら、侮蔑と悪意を込めた台詞も吐きつける。

かっと頭に血が上って飛び出そうとするサラサを、ザンはそっと押しとどめる。

「てめえらの勘違いを正してやる」

言いながら、ザンは少し強い力でサラサの肩を抱き寄せる。

「まあ、オレも勘違いしてた時期があつたからな。……いいか、守人の役目はな、魔物を殺すことじゃねえ」

険の強い視線で男達を睨めつけながら淡々と口にする。

「守人の役目は、その名の通り守ることだ。魔物と戦うのは守るべき人間の為で、目的じゃねえんだよ。こいつは……」

サラサの肩を抱いた手の力が少し強くなる。

「オレが、すべての力を使っても守るべき女だ。魔物なんかじゃねえ。守るべき、この世で一番、大切な人間だ」

乾いた砂が水を吸い込むように、言葉がサラサの心に吸い込んでいく。

素直に胸の奥に入っていく。

また涙がにじむ。

ただ、ただ、嬉しかった。

だが、それを聞いた男達は、泥の塊を口に押し込まれたように顔を歪める。

「けえっ！ 胸くそ悪い！ てめえこそ、人魚が目当てじゃねえのかよ？！」

「てめえら下衆と一緒にするんじゃないやねえよ」

言葉に乗った本物の殺気に、男達の顔色が一瞬で変わった。

待てをさせられている闘犬に似た表情のザンが言い捨てる。

「ここで叩きのめして魚の餌にしてやりてえのは山々なんだがな。今なら見逃してやる。とつとと失せろ」

問答無用で叩きのめされると思っていたのだろうが、ザンの言葉にかえって余裕ができたのか、男達は目配せをしあっているものの、立ち去る気配は無い。

金属が革をこする独特の音が波の音に混じって響く。ザンが長剣を半分程鞘から抜いた音だ。

無言だが明確な意思表示に、男達の間と同様が広がる。

所詮は自分より弱い人間にしか強く出れないゴロツキである。正

規の訓練を積んだ守人相手に敵うはずがない。

なにしろつい最近素手であっさりとあしらわれたばかりだ。しかも今は武装している。怪我では済まないだろうし、いざやるとなればザン自身も済ますつもりはないだろう。

しかし、目の前にぶら下がっている一攫千金に判断力を狂わされているのか、躊躇する素振りはあるっても、やはり逃げる気配がない。

ザンは呆れと諦めの溜息を吐いて、一步を踏み出そうとした。

「う、うわあああつ！」

突如、小男が宙を飛んだ。

いや、飛んだのではなく、持ち上げられたのだ。

その腰に、ぬめる太いツタのような触手が巻き付いていた。ザンの腕と同じくらいの太さのそれはよほどその力が強いのか、小男の腰は半分の太さになっている。

その正体をいち早く悟ったザンは、鞘を払い、サラサを庇いながら素早く後退するが、男達は自分の頭よりも高く持ち上げられた仲間に取り込まれ、呆然と立ちすくんでいた。

「下がれ！」

ザンの忠告に、間の抜けた表情で二人が振り返る。

「なにしてんだ！ 早く逃げろ、死ぬぞ！」

そこでようやく二人は我に帰って逃げようとするが、すでに手遅れだった。

次々と海中から現れる触手に絡め取られ、男達は空中に持ち上げられた。

続いて海から現れようとするそれを睨みつけ、ザンが舌打ちする。

サラサが、ひゅつと息を飲んだ。

4

奥歯が、勝手にカチカチと鳴る。

「なに……？ なんなの……？」

得体の知れない恐怖に襲われながら、サラサは海から上がってくるそれを見た。

岩棚に掛かった巨大な足はヤシガニに似た分厚い甲羅に覆われ、その表面にはフジツボが張り付いており、先端には三日月型のかぎ爪がのび、岩をガリガリと削りながら突き立った。

続いて波を割って立ち上がってきたその姿を見た瞬間、サラサは気を失いそうになる。

それは、悪夢にも出てこないような異形だった。

海水を滴らせる三角形の陰影を見せる巨軀は小山のような質量を湛え、六本の足に支えられた身体の表面は汚泥のような粘膜でいやらしくぬめっている。

その身体の下から伸びる触手は二十本以上が宙に躍り、捕らえた男達を弄ぶようにゆらゆらと揺れている。

まるで犬とワニを掛け合わせたような異常に大きな頭部には目が無く、巨軀の天辺からぶら下がるようにくつついていた。

そのぞろりとナイフじみた牙が並ぶ口もまた巨大で、人間など飲みにできるだろう。

魔物。

サラサはそれを形容するのに、他の言葉を思いつけなかった。

村人は自分を魔物と呼ぶが、おそらく本物の魔物をみたことなどないに違いない。

それは「違う」存在だった。

そこに存在するだけで、周囲すべてを否定してしまうものだ。

一目見れば恐れない者などいない。

それゆえにこそ魔物なのだと、サラサは心の底から理解した。

身体がガタガタ震え出すが、あまりの恐怖に声を上げることすら出来ない。

自分をしっかりと抱き留めるザンの腕から伝わる温もりだけが、サラサの正気を支えていた。

……………っ！！！！

突如、脳の中を直接引つかき回されるような、甲高く不快な高音を魔物が発する。

驚いたサラサが両耳を押さえ、ザンの顔を見上げると、ザンは多少顔をしかめていたいたが、厳しい表情を崩さずに、眼光鋭く魔物を睨んでいた。

「うわあああつつつ！」

最初に吊り上げられた小男が悲鳴を上げた。

「！」

すぐになにが起きるか察したザンが、サラサの顔を自分の胸に押しつけてその視界を塞ぐ。

小男は絶叫を上げたまま、内部にもびっしりと牙の生えた魔物の口の中に放り込まれる。

悲鳴が湿ったものになり、骨と肉をかみ砕きすり潰すおぞましい音が響き渡った。



悲鳴が途切れ、鳥肌が立ちそうな嚙下の音。

そのけしてけして短くはない時間、吊り上げられた残りの二人は、痴呆のようにポカンと口を開けて間抜け面を晒していた。

だが、魔物に血生臭いおくびを吐きかけられ、ようやく正気に戻って喚き散らし始めたものの、それもすぐにくぐもって止む。

歯が砕けるのではないかと思うほど奥歯を噛みしめて、惨状を見つめるザンの視線を辿ったサラサの顔が一気に蒼白に変わる

ゆらゆらと揺れる触手の一本一本の先に、本体に比べれば小さい、サメのものに似た口が開いている。

喉元にそれががっぷりと食い付いた男二人の身体が、屠殺された家畜のように、数本の触手に支えられてぶら下がっていた。

「まさかこんなに早く現れるなんてな……」

一瞬で流血の現場に変わった状況に絶句しているサラサの耳に、ザンの呟きが届く。

独り言なのか、サラサに話してるのか、どちらともいえないザンの声には悔しさが滲んでいた。益体もないチンピラ連中とはいえ、目の前で人の命が魔物に奪われたことが許せないのだろう。

「……サラサ」

魔物の注意を引かないように、できるだけ小さく絞られた小声で

ザンがサラサに話しかける。

惨劇から目を離せないでいたサラサは、その声で我に返り、ザンに目を向ける。

絡み合った視線の先、ザンのその瞳には強い決意が浮かんでいた。

何故か例えようもない悪い予感がサラサの胸に広がる。不安を押し殺しながら問い返す。

「……どうしたの？」

「……お前は逃げる。オレがあいつの相手をする」

「っ?!」

「……声を出すな。あいつの注意を引いちゃう」

驚きの声を上げようとするサラサの口を素早く押さえ、魔物の動きをつかがう。

魔物は新鮮な血の臭いに酔っているのか、微かに身を震わせて喉を鳴らしているだけで、今は動きを止めている。

「……どうもあいつは音でものを判断してるみてえだ。幸いというか、人魚の子は気絶したままで、今のところあいつの注意を引いてない」

そっだ、あの子、フラムは?!

口を押さえるザンの手を振り払って、辺りを見回す。

いた。

魔物を挟んで向こう側と言っているいい位置。最初に殴り倒されて気絶したままのようで、立ち回っているうちに随分離れてしまった。

魔物とサラサ達にフラム。この三者の距離はほとんど変わらないが、フラムに近づくには魔物の目の前を横切らなければいけない。

まさか死んではないと思うが、今すぐにも駆け寄りたい衝動を抑えて、サラサはザンの顔を見る。

「……すまん、あの子を連れて下がる余裕が無かった」

魔物が出てきたタイミングから言っても、その位置にしても、ザン達がフラムの方に近寄ることは不可能だった。フラムは三者の中で一番海に近いところにいたのだ。無理して近づけば、海を背にして魔物と退治するはめになっていただろうが、ザンはサラサに頭を下げた。

サラサにしても、ザンの行動が間違っていたとは思わないが、だからといって今の危険が消えて無くなるわけではない。

今にも飛び出しそうな様子で、泣きそうな視線を倒れたままのフラムに注ぐ。

「……サラサ、お前は逃げる。これはオレの判断間違いだ。オレが責任を持ってなんとかする。だから……」

「なんとか……って?!」

声が高ぶりそうになったサラサは、ザンの身体が震えていることに気付く。

「……ザン……?」

「……やっぱりバレたか」

無理に戯けて浮かべたザンの笑いは、はっきりと引きつっていた。

その顔をよく見れば、蒼白とまでは言えないまでも、かなり血の気が引いている。

問い掛けるサラサの視線に、ザンの笑いが苦いものになる。

「……押さえようとしたんだが、やっぱり無理だな。……正直に言おう。オレは一人で魔物と戦うのは初めてなんだ」

「……初めて?!」

「……魔物と戦うのが初めてってわけじゃない。師匠の支援で実戦をしたことは何度もある。師匠のお墨付きももらった。ただ、一人で実戦つてのが初めてなんだ。……ついでに言えば、あんなでかい奴を見るのみな」

「……じゃあ、なんで戦うなんていうのよ? あの娘を助けて逃げれば……」

「……わかってくれ、サラサ。あの人魚を助けようとすれば、絶対にあの魔物の注意を引く。戦わないわけにはいかないだろう。それに、ここであいつを逃すと村に被害が出るかもしれない。見た目より、ずっと移動速度は速いみたいだしな」

それに、と眉根を寄せる。

「……情けないと思われても構わん。あいつと戦いながら、お前を守る自信が無いんだ」

「……………」

ザンの言葉に、サラサは一瞬驚いた顔をして、すぐに顔を伏せて肩を落とした。

「……だから、頼む。お前だけでも先に……………」

「……つたのよ」

「なに？」

聞き取りにくく、ぼそりと聞こえた声に、ザンはサラサの顔を覗き込む。

瞬間、サラサはその細腕からは想像もつかない強い力でザンの襟元を捻り上げると、無理矢理ザンの顔を自分の目の高さまで引きずり下ろした。

同じ高さで、ザンの黒瞳がサラサの赤い瞳と絡み合う。

「……わたしは、ザンに守ってくれなんて、頼んでない！」

瞳にある怒りの色と裏腹に、どこか泣きそうな声色だった。

「……ひとりにしないって、一緒にいてくれるって、約束してくれ  
たじゃない……」

サラサの口から溢れる膨大な想いに、ザンの口が塞がれる。

「……わたしのことなんて、背負ってくれなくていい。だから……」

サラサが続けようとした言葉は、突然上がった悲鳴に掻き消された。

ザンが弾かれたように顔を上げると、目を覚ましたフラムが、縛られたままで悲鳴を上げながらなんとかもがいているのが見えた。

一目魔物を見た瞬間恐慌状態に陥ったのだらう、自らの悲鳴が魔物の注意を引く可能性に気付いていない。

魔物の巨大な頭が、ゆっくりとフラムの方を向く。

「フラムッ！」

いち早く反応したのはサラサだった。

ザンの脇をすり抜け、稲妻のような速さで駆け出す。

魔物に恐怖を感じていないはずなのに、その動きに迷いは無かった。

魔物の注意をフラムから逸らす為、大声を上げながら落ちていた銛を拾い上げ、両手に構えて突撃する。

「サラサ?!」

その思い切りの良すぎるサラサの行動に、ザンが慌てて後に続いた。

声に反応してサラサに触手が殺到する。

ザンはサラサの前に飛び出し、気合いと共に淡い光を放つ長剣を一閃。

数本の触手がまとめて数本宙に舞い、どす黒い闇色の血液が飛沫く。

そこに生じた僅かな隙間にサラサが滑り込む。

「いやああああああ!」

一際高い悲鳴が上がる。

触手の群の一部がフラムに巻き付き、枯れ木でも扱つかのように軽々と宙に持ち上げる。再び気を失ったフラムの身体から力が抜ける。

サラサは疾走の勢いを殺さず、全身の力と体重を乗せて魔物の胴体に銛を打ち込む。ブギが鍛えた銛は、柔らかいとは見えない魔物の表皮を貫き、しっかりと握った手元まで突き立った。

魔物が甲高い怒りの声を上げる。

その隙に回り込んだザンが、フラムを捕らえた触手の根元を切り飛ばした。

宙に放り出されたフラムは、放物線を描いて運良く岩場から離れた海へと落ちる。

気を失っていたようだが、まさか人魚が溺れることはあるまい。

こちらを敵と認識したのか、それもと苦痛からか、魔物が手放した男達の身体も、湿った音を立てて岩場に落ちる。

返しが付いている為、抜くことが出来ない銚を手放して魔物から離れつつ、フラムが海に落ちるのを見届けたサラサは、安堵から一瞬気を逸らしてしまった。

「サラサッ！」

ザンの呼びかけは遅かった。

サラサが、あ、と思った時には、暴れる触手の一本がその足を払っていた。

そして、動きの止まったサラサの太股に、横殴りに襲った触手の牙が深々と打ち込まれる。

そのまま宙に吊り上げられながら、灼熱の激痛にサラサが声にならない悲鳴を上げた。



頭の中が白熱して、サラサの意識が遠くなる。

突然、獣のような雄叫びが轟いた。

ザンだ。

サラサの姿を見たザンは、まるで竜巻のような勢いで魔物へ突進した。

凄まじい形相を浮かべるザンの動きには、一切の防御も、洗練された動きもない、死に物狂いの突進だ。

その目にはサラサしか映っていない。

無数の触手がザンに向かって殺到する。

ザンは力任せになぎ払うが、触手の数が多すぎる。払いきれなかった触手が、ザンの身体にも次々と牙を打ち込んでいく。

それでも、ザンの目は魔物すら見ていなかった。

ただ、サラサだけに向けられていた。

右肩と左足に食い付く触手を切り飛ばし、顔面を狙ってきた触手は首を逸らして避けようとするが、避けきれずに血飛沫が舞う。

額から流れる血が左目を真っ赤に染める。

ザンの身体に傷が増えていく。

それでも、ザンは引く気配を見せない。それどころか、その手にした長剣は眩しいほどに輝きを増していく。

まるで、生命そのものを燃やし尽くすように。

サラサは激痛に朦朧となりながら、自らの血と、魔物の返り血で赤黒くまだらに染まるザンを見た。

……どうして？

どうして、そんなに傷つくの？

あんなに震えてたくせに。

あんなに怖がってたくせに。

怖いなら、逃げればいいのに。

わたしがいるから。

わたしのため？

逃げたって、わたしは、もう恨んだりしない。

もういい。

もういいから。

お願いだから逃げて。

掠れた声は、魔物と守人の怒号に掻き消される。

お願いだから……。

溢れた滴が宙に舞った。

わたしのために傷つかないで……！

その時、小山のような魔物の身体が動いた。

後ろにだ。

ザンの気迫と、眩しく輝く破魔の光に魔物が引いた。

再び雄叫びが上がる。

それを迎え撃つため、すでに半分以上に数を減らしていた魔物の触手が、雪崩を打ってザンへと向かう。

ザンは光り輝く剣を大きく振りかぶり、裂帛の気合いと共に触手の群に叩きつけた。

光が炸裂し、爆音が響き渡る。

触手の群の半分が吹き飛んでいる。そのすぐ向こうに、魔物の身体がある。

だが、ザンの両手もまた、内側から破裂したような傷で真っ赤に染まっていた。

自らの血で滑る柄を握りしめたザンは、振り絞るような動きで間合いを詰め、渾身の斬撃を魔物の胴体に見舞う。

破魔の光をまとった剣はその身体を易々と切り裂き、魔物の喉からはつきりとした苦鳴が吐き出される。

魔物は身体を震わせ、身体を支える凶悪な足をザンに振り下ろす。

ザンが返した刃は、それをも簡単に切り払った。

魔物は怒号と苦鳴をまき散らしながら、さらにザンを頭から飲み込もうと、その強大な顎を開いて襲いかかる。

振り切った剣を引き戻し、腰溜めに刺突の構えをとったザンは、津波のように襲いかかってくる魔物の口を睨みつけた。

流れ込む血で半分赤く染まった視界の中。

虚空のような魔物の口の奥、そこに血走り濺んだ巨大な眼球をザンは見た。

一際高く、両者が吠える。

交錯。

すべての音が、波の音すら止まったかに見えた。

ザンの長剣は、その顎がザンの身体をかみ砕く前に、喉の奥の眼球を貫いていた。

魔物の絶叫。

そして、断末魔の暴走。

すべての力を使い果たしたザンは、為す術無く吹き飛ばされた。

長剣が手から離れる。

魔物は海に逃げようとしていた。

魔物は、まだサラサを放していなかった。

ザンの目が、サラサを捉える。

サラサは、ザンを見つめていた。

青年の眼は、血で霞んでいた。

少女の眼は、涙で濡れていた。

手を伸ばせば届く距離。

二人の視線が絡む。

青年は最後の力で、手を伸ばした。

少女もそれに答えるように、手を伸ばした。

青年の手は、限界まで伸ばされる。

少女の手は、限界まで伸ばされなかった。

二つの手が、その先だけを搦めて、離れる。

青年は、少女の名を呼んだ。

少女は、それを聞いた。

怒濤がすべてを飲み込んだ。

\*\*\*\*\*

『ちえっ、なんだってんだよ』

少年は、十歳になるかならないくらいだろうか。肩を怒らせて、

木々の間の小道を一人で歩いていた。

『いいこぶりっこのブギはともかく、ナオまでなんだってんだよ』

子供のくせに妙に分別臭い幼馴染みと、二つ年下の、自分がいくところにはどこにでもついて来たがる女の子の顔を思い浮かべる。

元々は自分が言い出したことだ。

村から少し離れた小屋に、魔物の子がいる。だから近づいてはいけない。

それは、村の子供が大人達に必ず言い含められることだったが、少年は年相応の好奇心を発揮して、だったら肝試しをしようと言いつ出した。

なんでそんなことを思いついたのかはわからない。

強いて言えば、大人達が「やるな」と言っているからだと思う。

そんな大して意味のない思いつきを二人の幼馴染みに話したのが、返ってきたのは否定的な態度だった。

ブギがそういう態度をとることはある程度予想していたが、ナオまで強硬に嫌がったのは、少年にとって意外だった。

意地を張って、だったら自分一人でいくと歩き出しても、二人はついてこなかった。

こっそり後ろをうかがうと、ブギは呆れたような顔をしていたし、

ナオは迷っているようだったが、結局ついてこなかった。

少年は、やけくそと見栄だけで歩いた。

しばらく林の中の緩い坂道を歩くと、粗末な作りの小屋が見えてくる。

少年のまだ細い喉がゴクリと動く。

正直に言えば怖い。

このまま帰っても二人は見えないわけだし、どうしても誤魔化せるのではないか。

少しだけそんなことを考えたが、それはひどく卑怯な真似に思えた。

しかし、やはりというか、怖いものは怖い。

小屋の手前で木の陰に隠れて様子をうかがう。

『ねえ』

しばらくそんなふうにマゴマゴしていた少年の背後から、不意に声がかかった。

あまりの驚きに、悲鳴を上げて少年は飛び上がった。漏らさなかったのが不思議に思えるほど驚いた。

びくびくしながら振り向くと、布を頭からすっぽり被った、少年



より小柄な人影が立っていた。

『なにか、よう?』

女の子の声だ。

感じからすると、ナオと同じくらいかな、と少年は思った。

そして、どう答えたらいいか悩んでいるうちに、どんどん少年の思考は煮詰まっていく。

答えない少年を訝しく思ったのか、布の少女は首を傾げたようだった。

『おとうさんも、おかあさんも、いま、でかけてるよ?』

言いながら、ずれた布を不器用な手つきで直そうとする。

『あ……』

するり、と被った布が地面に落ちた。

少年は今度こそ心臓が止まりそうになった。

布の下から現れたのは、月光を固めたような白銀の髪と、血よりも紅い瞳をした女の子。

この子がそうなんだ!

驚きに目を見開く少年の前で、女の子は慌てて布を拾い上げて被

り直し、ゆつくりと少年の方を振り向いた。

『……あなたは、にげないんだね？』

心底意外そうな声だった。

『え？』

思ってもいないことを言われて、今度は逆に少年の方が首を傾げる。

確かに見た時には驚いたが、怖いとか思うよりも、むしろその美しさの方に少年は目を引かれたし、その女の子のどこか奥の方に、引かれるなにかを感じていたのだ。

ただ、やはりそれは言葉にするには難しすぎて、悩みつつまた黙り込んでしまう。

しばしそのまま二人で突っ立っていた。

やがて、女の子は被っていた布を肩まで下ろして、少年に言った。

『あたし、サラサ。あなたは？』

『へ……？』

『あなたの、なまえ』

無表情な深紅の瞳が少年を見つめる。

少年は慌てて答えた。

『あ、ぼ、ぼくのなまえはザン。ザンだよ』

無表情だった女の子の顔に、表情のようなものが浮かぶ。

『かつこいい、なまえだね』

自分の名前が褒められたことに、少年はしばらく気がつかなかった。

小首を傾げる女の子を見て、ようやく何を言われたのか理解して、  
いつそう慌てて返す。

『え、あ、ありがとう。……あの、き、きみのなまえ、サラサだっ  
け、……すごく、きれいななまえだとおもう、よ』

真っ赤になりながらザンが言った言葉に、サラサはちょっとびっ  
くりした顔を見ると、その白い頬を赤く染めて、はつきりと微笑み  
を浮かべた。

『……ありがとう』

ザンは一目でその笑顔に魅せられた。

そして、その笑顔を守りたいと心から思った。

本当に、心から思った。

波の音が、遠くに聞こえた。

## 終章

### 終章・月と潮騒

暗闇の中で、ザンは目を覚ました。

ゆっくり起き上がり、周りを見回す。

すでに一月以上を過ごした粗末な小屋の中は、相変わらすめばしい家具は何もなく、小屋の真ん中にある炉の中にくすぶる薪の燃えさしだけが、ここで人が生活していることの証だった。

その寒々とした雰囲気は、すでに秋に向かいつつある季節が見せる錯覚ではないだろう。

いまだに慣れることのできない、絶望的な孤独感に身を震わせる。

ザンがすべてを失ったあの夜から、一ヶ月以上が経っていた。

あの日、魔物が海に飛び込んだ時の波にのまれて意識を失い、気がついた時には朝日が降り注ぐ岬の岩場で倒れていた。

すぐさま跳ね起きて辺りを見回したが、朝日の照らす岬は、そこで起こったことの片鱗も見せず静まり返っていた。

誰も、何もなかった。

そこでザンは、魔物との戦いで瀕死になってもおかしくない負傷が、ほとんどふさがっていることに気がついた。

傷が無いわけではない。新しい傷は増えている。

傷に残る軽い引きつれだけが、負傷していたのが現実だと物語っている。それがなければ、すべて夢だったのではないかと思うほどだ。

そう、現実だったのだ。

蒼白な顔で辺りを見回す。

見つかるはずがない、と頭のどこかで解っていた。

それでも、認めることなど出来なかった。

探した。

探して、探して。

太陽が中天を過ぎ、空を明るく染めて沈んでいっても。

いくら探そうが、見つかりはしない。

救えなかったのだから。

守れなかったのだから。

満天の星空の下で呆然と星を見上げる。

それから二度目の朝日が昇るの見て、小屋に足に向けた。

ひよっとしたら、戻っているかも知れない。

だが、そんな淡い希望を打ち砕くように、ザンを迎えたのは無人の空間だった。

次にすべき行動を見つけられずに立ち尽くし、そこで初めて長剣を失ったことに気がついた。

顔を見せないことを不審に思ったブギが尋ねてきたが、ザンの様子を一目見ただけで何があったのか大体のことを察した。

ブギはザンに掛けるべき言葉もなく、黙って立ち去っていった。

その日の夜は嵐だった。

嵐が過ぎ去った村近くの浜辺に、魔物の死体が打ち上げられた。ザンと戦った魔物だ。

だが、失った長剣はもちろん、そんなものよりも遙かに大切なものは、見つからなかった。

長剣は守人の身分を証明するもので、それが無い限りザンは守人とは認められない。不注意からの紛失は処罰の対象になるが、魔物との戦闘で失ったということで罰はなく、新しいものが届くまで、ザンは休養ということになったと、ブギがしばらくして伝言に来た。

それから今までのことを、ザンはよく覚えていない。

色々あったような気もするし、何もなかったような気もする。

ブギ夫婦は、放っておくと搜索に出て食事もなくに摂らないザンを心配してよく顔を見せてくれていたし、婆様からの伝言もよく伝えに来てくれていた。

ナオは、あの夜以来姿を見ていない。

しばらく経って、ブギからナオは勉強の為に村を出ただけ聞かされた。

ザンの家族には、魔物との戦いで怪我をしているから、療養しているとブギが伝えてくれたらしい。

だが、それもこれも、ザンにとっては覚えている価値などない。

起きて、探して、寝る。

たまにブギなりヨナなりが持ってきてくれた食料を、勧められるままに口にすることはあったが、それ以外は食事もなくにしかった。

単調な繰り返し。

いつそのこと、終わらせてしまってもよかった。

それをしなかったのは、僅かな可能性でも、あの少女が帰ってくるという希望に縋っていたからだ。



可能性など、無いに等しいのは解っている。

もし無事なら必ず小屋に帰ってくるだろうし、どこかで怪我をして移動できなかったのだとしても、もう戻ってこなければおかしい時間が経っている。

光のない瞳で小屋の中を見回したザンは、ふと虚空を見上げ、寝床から立ち上がった。

小屋から出ると、夜気を含んだ風が吹いていた。

夏はすでに過ぎかけ、虫の音が響く夜はひんやりとした感触をザンの肌に残す。

真円を描く月が夜に掛かっていた。

白く濁りのない光が、夜道を照らしている。

ボンヤリと、子供の頃、夏の終わりの満月が見える夜は外に出てはいけな、と村の大人に言われたことを思い出す。

その夜に外に出たものは、死者の魂に連れ去られる、というのだった。

ザンの心にさざ波が立つ。

なにかに呼ばれるような、そんな感覚があった。

ザンはゆっくりと足を踏み出した。

人魚の岬。

足の赴くまま歩いて、ザンはその日の場所へと向かっていた。

「?!」

岬の突端。

ザンは自分の目を疑った。

だが、頭がそう思うのとは裏腹に、身体は即座に反応する。あの日以来、腑抜けていた身体へ急速に活力が満ちていく。

走った。

あの夜、戦いのあった岩場。その波打ち際に、月光が形を取ったような姿はあった。

星色の髪を持ち、背中を向けて座っている月の光は、紅玉の瞳を持っているはずだった。

ここしばらくの不摂生がたたったのか、目的の場所に着いた時には、すぐに言葉が出ないほど息が乱れていた。荒い息をつきながら言葉を探す。

言葉が口から出る前に、月の光が振り向かず口を開く。

「……来たんだね」

「サラサ……」

サラサは満月の光が降り注ぐ下、一糸まとわぬ姿で精緻な螺鈿細工の鞘に入った長剣を抱き、海の方を向いて岩に腰掛けていた。

「……生きて、いたんだな……」

掠れた声で、なんとか言葉を絞り出す。語尾が湿った。

「……ちょうど良かった、始まるよ」

ザンの言葉に應えるでもなく、不思議なほど静かな声で言っ、サラサが海を指さす。

「始まるって……？」

なにが、そう言いかけた時だった。

波の少ない静かな海に、小さな光がぼつんと現れる。

それは見る間に爆発的に広がり、あっという間に海面を覆っていく。

まるで光の草原が広がっているような光景だった。

やがて、光の粒が一つ海面から浮き上がった。

それを追うように、一つ、また一つと天へ舞い上がっていく。

海に向かって吹く風が、その光を海の方へと流す。

その光が見せる景色は、暖かく、どこか哀しみを感じさせた。

唐突に訪れた荘厳な光景に、ザンは惚けたように天を仰いでいた。

「昔の人は、この光を死んだ人の魂だと思ったらしいね」

相変わらず海の方を向いたまま、ぽつりとサラサが呟いた。

「天に昇れなかった光は、海に落ちて真珠になるって。ザンはその話、知ってるか」

村に伝わる昔話の一つだ。村の人間ならみんな知っているだろう。

サラサの表情は、ザンからはよく見えない。声にも感情が感じられなかった。

「でも、これって、そんな不思議なものじゃなくて、海の生き物の産卵なんだってさ。フラムが言ってた」

魂と卵の違いはあるが、先人はそこに同じく生命を見出していたのだろう。

正体を知ったところで、その光景の価値は減じることはなく、むしろザンの感慨を深くした。

言葉が途切れ、波の音だけが流れ、光の河はゆるりと流れていく。

「……ナオは、元気にしてる？」

突然の質問に、ザンは言葉に詰まった。

サラサはナオが何をしたのか知っているのだろうか。相変わらず感情が見えない声で判断がつかず、慎重に言葉を選んで答える。

「少し前に、央都に行ったよ。本格的に詠人の勉強をするんだってさ」

結局ザンはナオとは直接顔を合わせていなかったが、直接聞いた風を装う。

「そう……」

短く言って、サラサは再び黙り込む。

光と風の舞は、一切の音を発することなく、波の音だけを背景に繰り返されている。

そのあまりにも幻想的で現実感の希薄な雰囲気は、少しの雑音だけでもすべてが消え去ってしまいそうだった。

いつまでも魅入ってしまいそうな状景から、サラサに目を移したザンは、その細い肩が震えているのに気がついた。

「サラサ？」

「………なんで、なんできたのよ………？」

途切れ途切れの言葉は涙に濡れていた。

「……今日、会えなければ、諦めるつもりだったのに。……会っても、辛くなるだけだって、もっと辛い思いさせるだけだって、……解ってるのに……。わたしは……馬鹿だ」

漏れる嗚咽に喉を詰まらせながら虚空へと言葉を紡ぐ少女に、ザンは正面にしゃがみ込んでその細くひんやりとしたサラサの両肩にそっと両手で触れる。

華奢なその感触は、ザンにとってははつきりとした実感、また触れたいと願った感触だ。

「無理に喋らなくていい。後でいくらでも話せる。お前が生きてくれたってだけで、オレには十分だよ。とにかく、そんな格好じゃ身体が冷える。一度小屋に戻ろう」

なぜか胸を差し始めた嫌な感覚を押し込めつつ、サラサの肩を抱いて立たせる。

「ザン」

名前を呼ばただけだというのに、その刃物のような真剣さにザンは動けなくなった。

サラサは俯いたまま、螺鈿の鞘ごと長剣をザンの胸に押しつけ、そっと身体を離れた。

「わたしは、いけないよ」

言葉がザンの心臓を掴む。

半ば予想していたような、あらかじめ決まっていたような、まったく予想もしない言葉を聞いたような、名状しがたい感覚がザンの心に広がる。

「……………え？」

口の中が乾いていくのを感じながら、なんとか問い返す。

不安に耐えきれず、すがるように、長剣を押しつけるサラサの手に自分の手を重ねる。

「あの夜」

ぼつりとサラサが呟く。

光の河は、いつの間にかその尾を海から放していた。

「怖い魔物と戦ったね……。傷だらけになっても、戦ってくれたね……。わたしの……。ためだったんだよね。わたしがいなければ、逃げてたよね」

そうだ、とも、違う、とも言えずに、ザンは言葉に詰まる。

「魔物……。怖かった。でも、ザンが傷ついて、いっぱい血を流して、死んじゃうんじゃないかって……。その方がずっと怖かった……。でもね」

その時の恐怖を思い出したのか、サラサの身体が少し震えた。

「わたし……その時、どう思ったか判る……？ ……嬉しいって思っただよ」

罪人がその罪を告白するように、悲痛な響き。

「……ザンがあの時死んじゃったとしても、わたしはそう思ったのかもしれない。……この先、同じようなことがあつて、そうなったとしても……多分、きっと、わたし、そう思う」

ぼろぼろと、光る粒がいくつも俯いたサラサの顔から地面に落ちる。哀しく乾いた笑いが、その小さな唇から漏れる。

「ザンが、わたしを置いていくことになるのに……きっと、そう思っちゃう……。……わたしは、本当に魔物なのかもね……。？」

「そんなことっ……。！」

かける言葉を思いつけない。想いはザンの胸に溢れているのに、言葉という形になつてくれない。

重ねた手に力を込めても、その感触はひどく頼りなかった。

そつと、サラサは自分の手に重ねられたザンの手に、さらに自分の手を重ねる。

傷だらけの青年の手。

過日の夜、あんなにも愛しかったそれが、今はひどく哀しかった。



「あの夜から、ずっと、ずっと、言いたかった……」

顔を上げたサラサと、ザンの視線が絡む。

少女の顔に浮かんでいたのは、涙に濡れた笑顔。

再会を果たしてから、ザンが初めて見る笑顔だった。

だが、それはザンが見たいと願い、守ろうとした笑顔ではなく。

「……ごめんね。それと……」

なにかを諦めてしまった者の笑顔。

す、とザンに近づき、動けないザンの唇にそっと自分の唇を重ね、すぐに離れた。

「ありがとう」

なにかと捨てようとしている者の笑顔。

手のひらからこぼれ落ちる砂を受け止めるように、反射的に動いたザンの腕をすりと抜けて、サラサは光の残滓が残る夜の海に身を躍らせた。

「サラサっ！」

それを追おうとしたザンの目の前で、突然光が弾けた。

「……くっ?!」

不意のことに怯み、眩む目をこすって少女の姿を探す。

そして、見た。

満月を背景に、虹色にきらめく尾ヒレを持った月の光が、高く高く海から飛び上がるのを。

それは、あまりに冷たく、あまりに哀しい線を宙に描き、海へと落ちた。

まるで、月がこぼした涙のように。

ザンは、ただ呆然とそれを見送った。

やがて、光の河が流れゆき、光の残滓も消え去って。

月光だけが照らす、いつもの海に戻っても。

残された長剣を胸に抱いて、青年はそこに立ち続けていた。

ずっと。

……ずっと。

月は輝き、潮騒は謡<sup>うた</sup>つ。

いまでも。

そして

これからも。

## エピソード

### エピソード

「いま帰った」

入り口の織物を除けて顔を見せたのは、鍛え抜かれ、生活に磨かれた精悍な体躯の男だ。

「おとうさん！」

その顔を見た途端、幼子　小さな女の子は、跳ねるように立ち上がって、に駆け寄った。

「おかえりなさい！」

「ただいま」

男は愛情たつぷりの笑顔を満面に浮かべてしゃがみ込み、女の子を受け止めた。

「遅かったのね」

その様子を暖かな眼差しで眺めながら、小柄な女が男に歩み寄る。敷物の隙間から差し込んだ月光が、女の髪を同じ色に輝かせた。

「心配したのよ？」

「すまん、ちょっと事後処理に手間取ってな。帰り際までドタバタしてたんだよ。土産を調達する暇もなかったし、悪かった」

「いいえ。あなたが無事なら、それ以上必要ないよ」

するり、と男と女は、優しく繊細にその身体を擦り合わせる。まるで、鹿のつがいがそうするように、愛情溢れる仕草だった。

今この時間が、どれだけ貴重で幸せなことであるのか、知っているのだろう。

言葉など無くても、そこにはいくつもの時間と経験を経、何度も繋ぎ直してきたのであろう、強固な絆が目に見えるようだった。

「なにか、あるのか？」

「わかる？」

「まあ、それくらいはな。なにかは知らんが……」

男は苦笑いして顎を掻く。

「今日、婆様のところに行って、確認してきたんだけど……」

女は、自らの下腹部に手を当て、恥ずかしげに微笑んだ。

「多分、間違いないって」

「なに?!」

すぐにその意味を察した男の顔が、みるみるうちに喜色に染まる。

「そうか……！　オレが土産貰ってるんじゃ、ますます申し訳ないなあ」

男は嬉しそうに女を抱きしめると、恥じらいに少し俯く女の額にそっと自分の額を当てて、そっと顔を上げさせると、そのまま優しく唇を重ねる。

「おとうさん、あたしも！」

足にしがみついて、ぴょんぴょんと飛び跳ねつつ、女の子が催促する。

笑いながら頷いて女の子を抱き上げ、顔を寄せる。

ところが、女の子はそれをするりと避けて、男の顎に口づけた。

「あたし、これすき！」

男の顎にある傷に指先で触れながら笑顔を浮かべる女の子に、唇を避けられたことで微妙な顔になっていた男の顔も笑み崩れる。

そして、女の子を下ろすと、しゃがみ込んだまま、すぐ側の女の下腹部に頬を押し当てる。

「次は、男の子がいいかな？」

「どっちでもいいさ、元気で生まれてくるなら」

女の問いに答えながら、男は目を閉じた。

「早く生まれてこい。辛いこともいっぱいあるかもしれないが、きつとそれ以上に幸せなことが、きつとある。待ってるぞ」

まだ見ぬ我が子に語りかける男の顔を眺める女の顔には、幸せが溢れていた。

「お腹はすいてない？　なにか食べてきた？」

「いや、さつきも言ったが、バタバタしてたんだ。腹ぺこだ」

「じゃあ、残り物で悪いけど、少し暖めるね」

微笑んで、炉の方を向いた女の瞳が、炎を照り返して紅く輝いた。

「ほら、ここは外の風が当たる。火の側へいけ」

「はい」

火の側で作業を始めた女のもとへいく姿を眺め、男は入り口の敷物を整え、腰の長剣を螺鈿の鞘ごと抜き、自分も火の側へ寄った。

夜の空には月が掛かり。

散りばめられた星々の囁きのように、潮騒が遠く聞こえている。

了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1989p/>

---

月と潮騒

2010年11月28日23時00分発行